

志木市遺跡群 18

田子山遺跡第93地点

田子山遺跡第96地点

西原大塚遺跡第137地点

西原大塚遺跡第155地点

2009

埼玉県志木市教育委員会

志木市遺跡群 18

田子山遺跡第93地点

田子山遺跡第96地点

西原大塚遺跡第137地点

西原大塚遺跡第155地点

2009

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 白砂 正明

さて、ここに刊行する『志木市遺跡群18』は、国庫・県費補助事業として、教育委員会が、平成18・19年度に確認調査及び発掘調査を実施した市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

今回は、そのうちの発掘調査を実施した田子山遺跡2地点と西原大塚遺跡2地点の合計4地点分を中心に報告しています。

田子山遺跡については、縄文時代草創期から近世・近代にかけての幅広い時期の複合遺跡で、遺跡内には、県指定文化財の『田子山富士』があることで有名です。今回報告する地点は、第93地点と第96地点です。第93地点からは、縄文時代の土坑1基と平安時代の住居跡3軒が発見されました。第96地点からは、縄文時代の土坑1基と古墳時代～平安時代にかけての土坑1基と溝跡1本が発見されました。特に第93地点の平安時代の住居跡からは、比較的に遺物が多く出土し、中には志木市最古の文字資料としても貴重な墨書土器も2点含まれていました。

次に、西原大塚遺跡については、市内最大の遺跡で、近年、この地区に西原特定土地区画整理事業が計画され、この事業に伴い、10年以上にわたり大規模な発掘調査が実施されてきました。これにより、この遺跡には、縄文時代中期後葉と弥生時代末葉～古墳時代前期にかけての2つの時代に大集落が形成されていたことが判明してきました。今回報告する地点は、第137地点と第155地点です。両地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡が発見され、土器・石器が出土しました。

以上のような貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことになりました。今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。次第です。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する遺跡群の平成18・19年度分の調査成果と発掘調査を実施した田子山遺跡第93・96地点、西原大塚遺跡第137・155地点の4地点分を発掘調査報告書としてまとめたものである。
2. 発掘調査・整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け実施した。
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。
深井恵子 第2・3章第3・4節の遺構、第4・5章第2節の遺構
青木 修 第2章第2節、第3・4章第2節(2)・(4)の縄文時代の土器
4. 田子山遺跡第93地点の遺構外から出土した石器の実測は、(有)アルケーリサーチ(代表取締役藤波啓容)に依頼した。
5. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・鈴木浩子が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木 修が行った。写真撮影は青木 修が行った。
6. 調査組織

調査主体者	志木市教育委員会
教 育 長	柚 木 博 (平成17年10月～平成20年3月)
”	白 砂 正 明 (平成20年4月～)
教 育 政 策 部 長	新 井 茂 (平成17年4～6月、10月～平成21年3月)
”	山 中 政 市 (平成21年4月～)
参事兼生涯学習課長	宮 川 英 夫 (平成18年4月～平成19年3月)
生涯学習課長	吉 田 洋 (平成19年4月～平成21年3月)
”	土 岐 隆 一 (平成21年4月～)
生涯学習課副課長	土 岐 隆 一 (平成20年4月～平成21年3月)
”	醍 醐 一 正 (平成21年4月～)
生涯学習課主幹	醍 醐 一 正 (平成16年4月～平成18年3月、平成18年8月～平成19年3月)
”	内 田 誠 (平成18年4月～7月)
”	今 野 美 香 (平成19年4月～11月)
”	大 熊 克 之 (平成19年12月～)
生涯学習課主査	佐 々 木 保 俊 (昭和61年4月～平成21年8月31日)
”	今 野 美 香 (平成15年8月～平成19年3月)
”	清 水 隆 (平成19年5月～7月)
”	尾 形 則 敏 (平成21年4月～)
生涯学習課主任	尾 形 則 敏 (昭和62年4月～平成21年3月)
”	松 永 真 知 子 (平成18年4月～)
”	高 野 雅 也 (平成20年4月～平成21年7月)
生涯学習課主事補	徳 留 彰 紀 (平成21年4月～)
志木市文化財保護審議会	神 山 健 吉 (会長)
	井 上 國 夫・高 橋 長 次・高 橋 豊・内 田 正 子 (委員)

7. 発掘調査及び整理作業参加者

○田子山遺跡第93地点

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
発掘協力員 遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・屋野恵美子・松浦恵子・山口優子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

○田子山遺跡第96地点

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査補助員 青木 修
発掘協力員 鈴木浩子・屋野恵美子・松浦恵子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

○西原大塚遺跡第137地点

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
調査補助員 青木 修
発掘協力員 鈴木浩子・屋野恵美子・松浦恵子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

○西原大塚遺跡第155地点

調査担当者 尾形則敏
調査員 深井恵子
発掘協力員 鈴木浩子
重機オペレータ 田中三二（大塚屋商店）

○整理作業

調査員 深井恵子
調査補助員 青木 修
整理協力員 遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・屋野恵美子・増田千春・
松浦恵子・山口優子

8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。
記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

会田 明・浅野信英・荒井幹夫・石井 寛・井上洋一・上田 寛・江原 順・
大谷 徹・加藤恭朗・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・黒濟和彦・
小出輝雄・肥沼正和・小流 勉・小宮恒雄・齊藤 純・齋藤欣延・坂上克弘・
坂本 彰・笹森健一・斯波 治・渋谷寛子・鈴木一郎・鈴木重信・真保昌弘・
高崎直成・高橋 学・田中広明・照林敏郎・鍋島直久・根本 靖・野沢 均・
原 京子・早坂 廣人・坂野千登勢・藤波啓容・福田 聖・堀 善之・前田秀則・
松本 完・松本富雄・望月一樹・三田光明・宮瀧山紀子・柳井幸宏・山田尚友・
山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

田子山遺跡第93地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第96地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡第137地点（開発主体者 個人）

西原大塚遺跡第155地点（開発主体者 個人）

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
第1・2図 1:10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製
第3・18図 1:2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン
2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。
4. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 挿図版中のスクリーントーンは、各挿図版内に内容を示した。ただし、表示の無いものは遺構挿図版中ではカマドの範囲、遺物挿図版では、土器の赤彩範囲を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。
Y = 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡 H = 平安時代の住居跡 D = 土坑
M = 溝跡 P = ビット

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表目次／図版目次

第1章 平成18・19年度の調査成果	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 調査に至る経過	7
第2章 田子山遺跡第93地点の調査	13
第1節 遺跡の概要	13
第2節 縄文時代の遺構・遺物	16
第3節 平安時代の遺構・遺物	18
第4節 遺構外出土遺物	24
第3章 田子山遺跡第96地点の調査	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 検出された遺構・遺物	31
第4章 西原大塚遺跡第137地点の調査	35
第1節 遺跡の概要	35
第2節 検出された遺構・遺物	37
第5章 西原大塚遺跡第155地点の調査	41
第1節 遺跡の概要	41
第2節 検出された遺構・遺物	42
第6章 調査のまとめ	46
図 版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	市域の地形と調査地点—平成18年度— (1/20000)	2
第2図	市域の地形と調査地点—平成19年度— (1/20000)	3
第3図	田子山遺跡の調査地点 (1/3000)	14
第4図	遺構分布図 (1/150)	15
第5図	213号土坑 (1/60)	17
第6図	213号土坑出土遺物 (1/3)	17
第7図	66号住居跡 (1/60)	19
第8図	66号住居跡カマド (1/30)	20
第9図	66号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	21
第10図	67号住居跡 (1/60)	22
第11図	68号住居跡 (1/60)	23
第12図	68号住居跡出土遺物 (1/4)	24
第13図	遺構外出土遺物 (1/3)	27
第14図	遺構分布図 (1/100)	30
第15図	土坑 (1/60)	33
第16図	11号溝跡・出土遺物 (1/60・1/3)	33
第17図	遺構外出土遺物 (1/3)	33
第18図	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5000)	36
第19図	遺構分布図 (1/150)	37
第20図	532号住居跡 (1/60)	39
第21図	532号住居跡出土遺物 (1/3)	39
第22図	遺構外出土遺物 (1/3)	39
第23図	遺構分布図 (1/150)	41
第24図	537号住居跡 (1/60)	43
第25図	537号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	44
第26図	遺構外出土遺物 (1/3)	44

表目次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第2表	平成18年度調査地点一覧 (1)	8
	平成18年度調査地点一覧 (2)	9

第3表	平成19年度調査地点一覧(1)	9
	平成19年度調査地点一覧(2)	10
第4表	田子山遺跡第93地点の発掘調査工程表	13
第5表	213号土坑出土遺物一覧	16
第6表	66号住居跡出土遺物一覧	25
第7表	67号住居跡出土遺物一覧	25
第8表	68号住居跡出土遺物一覧	26
第9表	遺構外出土の縄文土器一覧	28
第10表	田子山遺跡における平安時代の住居跡一覧(1)	48
	田子山遺跡における平安時代の住居跡一覧(2)	49

目 次

図版1	田子山遺跡第93地点
	1. 調査区近景 2. 調査区整備風景 3. 213号土坑 4. 調査風景 5・6. 66号住居跡 7. 66号住居跡カマド遺物出土状態 8. 66号住居跡カマド
図版2	田子山遺跡第93地点
	1. 67号住居跡 2. 67号住居跡硬化面 3. 68号住居跡測量風景 4・5. 68号住居跡遺物出土状態 6. 68号住居跡粘土検出状態 7. 68号住居跡 8. 68号住居跡入口梯子穴付近
図版3	田子山遺跡第93地点
	1. 213号土坑出土遺物 2. 66号住居跡出土遺物
図版4	田子山遺跡第93地点
	68号住居跡出土遺物
図版5	田子山遺跡第93地点
	1. 67号住居跡出土遺物 2. 遺構外出土遺物
図版6	田子山遺跡第96地点
	1. 調査区近景 2. 発掘風景 3・4. 11号溝跡 5. 214号土坑 6. 215号土坑 7. 出土遺物
図版7	西原大塚遺跡第137地点
	1. 調査区近景 2. 発掘風景 3・4. 532号住居跡 5. 532号住居跡跡 6. 2～5号ピット 7. 532号住居跡出土遺物 8. 遺構外出土遺物
図版8	西原大塚遺跡第155地点
	1. 調査区近景 2. 537号住居跡 3. 537号住居跡東コーナー 4. 537号住居跡赤色砂利層検出範囲 5. 537号住居跡跡 6. 537号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状態 7. 出土遺物

第1章 平成18・19年度の調査成果

第1節 地域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06㎢、人口約7万人の自然と文化の調和する都市である。

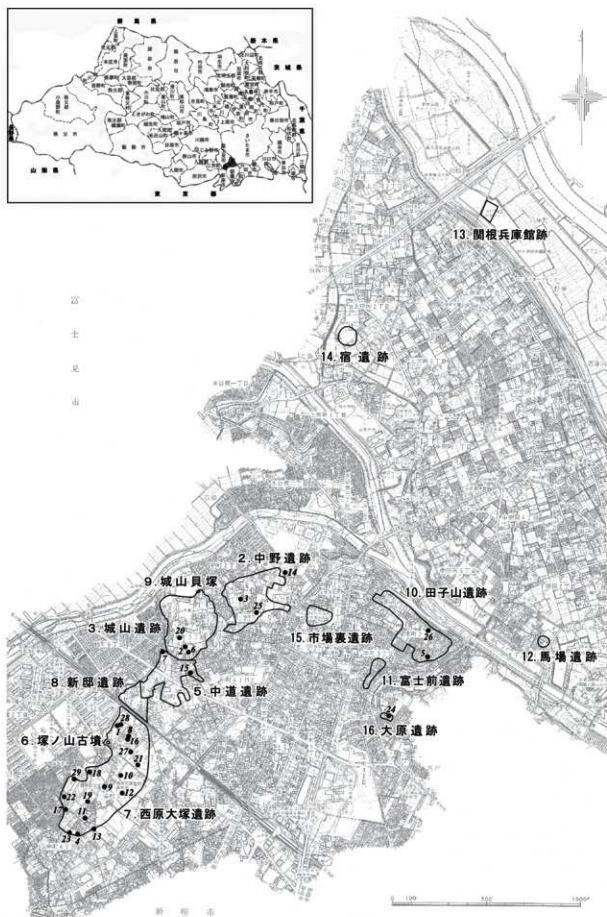
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新郷遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、

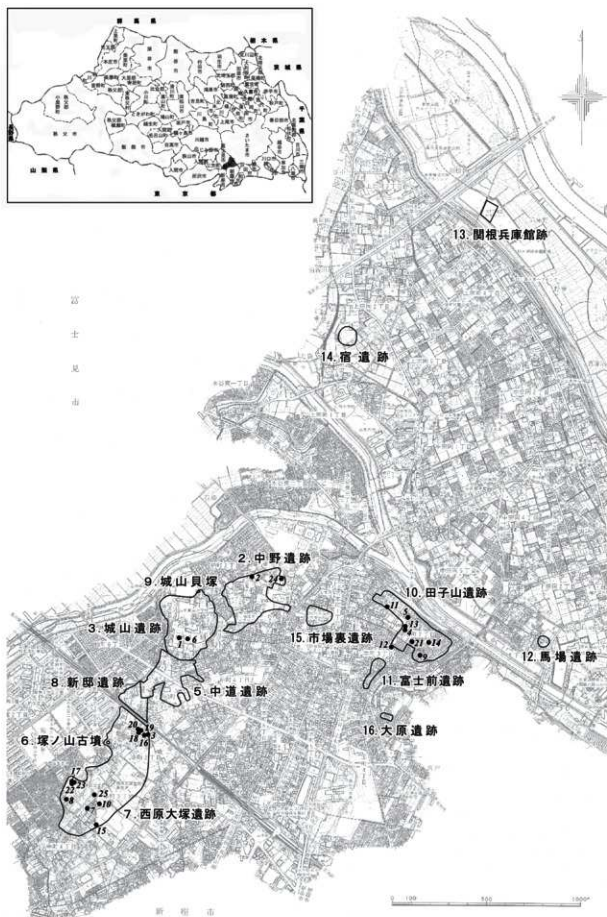
№	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280 ㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、跡高閣遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、跡高閣遺物等
5	中道	45,860 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文・土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800 ㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、古銭等
8	新郷	16,400 ㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 ㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 ㎡	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、土坑墓、ローソク掘り遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 ㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 ㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 ㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 ㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構造物	木・石製品
15	市場裏	10,700 ㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 ㎡	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合 計		467,280 ㎡					

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

平成20年10月30日 現在



第1図 市域の地形と調査地点—平成18年度—(1/20000)



第2図 市域の地形と調査地点—平成19年度—(1/20000)

関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅷ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7年（1995）度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13（2001）年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層のⅣ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で捺糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、捺糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡3軒（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西

原大塚遺跡では、住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口緑壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げる事ができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸柄が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器環が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらまうき館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『おおいししのの廻国雑記』（註2）に登場する「おおいししのの大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、『おおいししのの大塚十五坊』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力

と言えるであろう(神山 1988・2002)。また、平成7(1995)年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

平成11~14(1999~2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治2~5年)に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの錆着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 調査に至る経過

志木市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木-池袋駅間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一

第1章 平成18・19年度の調査成果

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積(m ²)	確認調査日	免振期間	備考
1	西原大塚道跡第127地点	幸町2丁目3030-3・4、3035の一部	共同住宅建設	538.74	4.4		盛土保存適用
2	城山道跡第59地点	柏町3丁目2646-1・4	個人住宅及び倉庫建設	495.94	4.6	4.10～6.22	免振調査面積110m ² /盛土保存適用385.94m ² /埋戻し7月20・21日
3	中野道跡第66地点	柏町1丁目1502-1	個人住宅建設	90.89	4.11		盛土保存適用
4	西原大塚道跡第128地点	幸町4丁目3391-1、3391-12の各一部	個人住宅建設	129.05	4.13		遺構・遺物は検出されなかった
5	田子山道跡第93地点	本町2丁目1748-11	個人住宅建設	175.46	4.17	4.24～5.12	後述 第2章参照
6	城山道跡第58地点	柏町3丁目2646-1の一部 他9筆	道路新設工事	675.44	4.18～21	6.29～8.26	免振調査は志木市道跡調査会が実施/免振面積880.77m ² /最終埋戻し8月28日
7	中道道跡第65地点	柏町5丁目2958-1の一部	共同住宅建設	556.76	5.8	7.20～8.11	免振調査は志木市道跡調査会が実施/埋戻し8.12
8	西原大塚道跡第129地点	幸町2-3040-12	個人住宅建設	64.12	5.11		盛土保存適用
9	西原大塚道跡第120-2地点	幸町3丁目3149の一部	保育園建設	566.66	5.17	5.30～6.26	免振調査は志木市道跡調査会が実施/埋戻し6月27・28日/日17年度にN120-1を実施
10	西原大塚道跡第130地点	幸町3丁目3228、3229、3231-1、3232-1、3233の各一部	公園造成	1,203.00	6.21～23	10.2～H19.1.12	免振調査は志木市道跡調査会が実施/埋戻し1月13・15～17日
11	西原大塚道跡第131地点	幸町3丁目3135-1の一部、3135-2・7、4丁目3401-1・6	共同住宅建設	1,254.75	8.22～23	8.30～9.20	免振調査は志木市道跡調査会が実施/免振調査面積は472.21m ² /埋戻しなし
12	西原大塚道跡第132地点	幸町2丁目3083、3014-1の各一部	共同住宅建設	323.48	6.8		盛土保存適用
13	西原大塚道跡第133地点	幸町3丁目3138-3	個人住宅建設	123.31	6.20		遺構・遺物は検出されなかった
14	中野道跡第67地点	柏町1-1471-17-29	分譲住宅建設	95.14	8.7		遺構・遺物は検出されなかった
15	中道道跡第66地点	柏町5丁目2950-11	分譲住宅建設	59.85	8.18		遺構・遺物は検出されなかった
16	西原大塚道跡第134地点	幸町2丁目3040-6	駐車場	63.47	—		盛土保存適用
17	西原大塚道跡第135地点	幸町4丁目3383-5	共同住宅建設	130.09	8.29		遺構・遺物は検出されなかった
18	西原大塚道跡第136地点	幸町3丁目3124-3	分譲住宅建設	99.29	10.20		盛土保存適用
19	西原大塚道跡第137地点	幸町3丁目3137-4	個人住宅建設	100.00	11.9	11.14	後述 第4章参照
20	城山道跡第60地点	柏町3丁目2643-1他11筆	福祉施設建設	5,322.66	12.20～22	H19.2.15～6.8	免振調査は志木市道跡調査会が実施/免振調査面積は2,166m ² /盛土保存適用3156.66m ² /埋戻し6月7～9・11・12日

第2表 平成18年度調査地点一覧(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備 考
21	西原大塚道跡第138地点	幸町2丁目3064、3065、3066、3071の各一部	共同住宅建設	674.65	12.25	H19.2.5	発掘調査は志木市道跡調査会が実施／発掘調査量は20㎡／駐車場の250㎡を盛土保存適用
22	西原大塚道跡第139地点	幸町3丁目3107-2の一部	個人住宅建設	103.26	12.27		遺構・遺物は検出されなかった
23	西原大塚道跡第140地点	幸町4丁目3391-1、3462-3の一部	共同住宅建設	183.33	H19.1.10		遺構・遺物は検出されなかった
24	大原道跡第5地点	本町4丁目1015-39・64	分譲住宅建設	164.01	1.11		盛土保存適用
25	中野道跡第68地点	柏町1丁目1519-16	分譲住宅建設	156.20	1.18		盛土保存適用
26	田子山道跡第94地点	本町2丁目1687-7	分譲住宅建設	101.44	1.24		盛土保存適用
27	西原大塚道跡第141地点	幸町2丁目3070-2	倉庫及び木工作業所	721.48	1.23		重機は業者提供
28	西原大塚道跡第142地点	幸町2丁目3030-1、3040-1の各一部	個人住宅建設	69.37	2.20		遺構・遺物は検出されなかった
29	西原大塚道跡第143地点	幸町3丁目3098の一部	開発計画策定	359.75	2.27		遺構・遺物は検出されなかった
合 計				14,601.59			

第2表 平成18年度調査地点一覧(2)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備 考
1	城山道跡第60地点	柏町3丁目2643-1他11筆	福祉施設建設	5,322.66	12.20～22	H19.2.15 ～6.8	発掘調査は志木市道跡調査会が実施／発掘調査量は2,166㎡／盛土保存適用3,156.66㎡／埋戻し6月7～9・11・12日
2	中野道跡第69地点	柏町1丁目1484-19・20・44	分譲住宅建設	165.67	4.26		遺構・遺物は検出されなかった
3	西原大塚道跡第144地点	幸町2丁目3024-2・9、3046-1・2・3の各一部	個人住宅建設	73.40	6.22		盛土保存適用
4	田子山道跡第95地点	本町2丁目1727-6、1728-2の一部	個人住宅建設	88.46	7.12		遺構・遺物は検出されなかった
5	田子山道跡第96地点	本町2丁目1698-29	個人住宅建設	55.75	7.9	8.20	後述 第3章参照
6	城山道跡第61地点	柏町3丁目2648-1	分譲住宅建設	710.96	7.18～19	8.27～10.5	発掘調査は志木市道跡調査会が実施／発掘調査192.49㎡(道路部分)／盛土保存適用518.47㎡(宅地部分)／埋戻し10月6・9日
7	西原大塚道跡第145地点	幸町3丁目3133-7・8	個人住宅建設	136.35	7.24		遺構・遺物は検出されなかった
8	西原大塚道跡第146地点	幸町3丁目3107-2	分譲住宅建設	504.06	7.26		盛土保存適用
9	田子山道跡第97地点	本町3丁目1816-14・15	分譲住宅建設	311.79	9.4	9.25～10.1	発掘調査は志木市道跡調査会が実施／埋戻し10月1・2日

第3表 平成19年度調査地点一覧(1)

番号	調査地点	所在地	調査原因	面積 (㎡)	確認調査日	発掘期間	備考
10	西原大塚道跡第147地点	幸町3丁目3146-1,3113-1	共同住宅建設	651.00	10.25		盛土保存適用
11	田子山道跡第98地点	本町2丁目1713-1・7	個人住宅建設	340.67	11.1		盛土保存適用
12	田子山道跡第99地点	本町3丁目1829-11	個人住宅建設	79.44	11.6		遺構・遺物は検出されなかった
13	田子山道跡第100地点	本町2丁目1728-2	個人住宅建設	132.24	11.8		遺構・遺物は検出されなかった
14	田子山道跡第101地点	本町2丁目1735-7,1736-3・4	分譲住宅建設	248.66	11.9		遺構・遺物は検出されなかった
15	西原大塚道跡第148地点	幸町3丁目3138-3,3139-1,3140-4の一部	境界ブロック工事	384.23	12.6		遺構・遺物は検出されなかった
16	西原大塚道跡第149地点	幸町2丁目3046-1の一部	個人住宅建設	66.16	12.20		遺構・遺物は検出されなかった
17	西原大塚道跡第150地点	幸町3丁目3091の一部	個人住宅建設	131.28	H20.2.1		遺構・遺物は検出されなかった
18	西原大塚道跡第151地点	幸町2丁目3025-1・4	個人住宅建設	125.65	2.8		遺構・遺物は検出されなかった
19	西原大塚道跡第152地点	幸町2丁目3025-5・13	宅地造成	164.12	2.25		遺構・遺物は検出されなかった
20	西原大塚道跡第153地点	幸町2丁目6街区14画地	区画整理に伴う宅地造成	325.94	2.29		盛土保存適用
21	田子山道跡第102地点	本町2丁目1731-7	宅地造成	361.39	3.5		盛土保存適用
22	西原大塚道跡第154地点	幸町3丁目54街区9-2画地	分譲住宅建設	120.20	3.6	3.17～3.19	発掘調査は志木市道跡調査会が実施／埋戻しなし
		幸町3丁目54街区9-4画地		120.00			
23	西原大塚道跡第155地点	幸町3丁目54街区9-3画地	個人住宅建設	120.00	3.11	3.18	後述 第3章参照
24	中野道跡第70地点	柏町1丁目1468-1	共同住宅建設	366.00	3.24		宅地部分対象／全体489㎡／盛土保存適用
25	西原大塚道跡第156地点	幸町3丁目3132-3,3230-2,3152-1・2	分譲住宅建設	1,260.85	3.26～27		盛土保存適用
合 計				4,346.83			

第3表 平成19年度調査地点一覧(2)

層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会は文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

ここで、志木市における発掘調査の経過を振り返ってみると、まず、1973（昭和48）年に西原大塚道

跡において発掘調査が実施されたのが最初の調査であろう。そして以後、1982（昭和57）年までは、志木市史編さん事業に伴う学術的な発掘調査が実施されていた。1983（昭和58）年には、志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には当市にとって最大規模の調査となった城山遺跡第1地点の調査が実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

そうした中、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多いことから、こうした小規模の開発にも対応する必要がある。しかし、小規模な開発の当事者は個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年以降、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を実施することになったのである。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。特に、発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは、こうした理由によるものと考えられる。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。また、平成8年度は全体の調査件数及び面積が激減しているが、教育委員会で行った発掘調査の件数は逆に過去最高の9件にのぼり増加したという現象が生じた。これは、平成7年度に調査対象区域の見直しを行ったことが影響したのと考えられる。その見直しの内容は、今まで「遺跡の存在する可能性が高い地域」でも発見が全く無かった地域を過去の調査成果により割り出し、その地域については「将来遺跡が発見される可能性がある地域」に変更したというものである。なお、平成9年度より、遺跡の現状保存を目的とするため、遺跡の盛土保存を適用するに至っている。

平成10年度以降は、西原大塚遺跡内における個人住宅建設を中心とした各種開発が著しい増大を見ている。これは、平成5年度以降、西原大塚遺跡内では土地区画整理事業が開始され、これに伴い発掘調査が実施されているが、工事の完了後に周辺地域の開発が始まったためと考えられる。今後は、この地域の開発については、市内の他地域よりも増大することが予想されるため、埋蔵文化財保存事業についても充分留意しなくてはならないであろう。

なお、教育委員会は、平成15年1月、今までに集積された調査データに基づいて、遺跡の存否及び範囲について大々的に修正を行った。これにより、市場遺跡・水川前遺跡の2遺跡の削除と中野・城山・中道・西原大塚・新邸・田子山・富士前・市場裏遺跡の8遺跡の一部範囲が縮小され、市内遺跡総数は14遺跡に変更されることになった。同時にこれは、手続き上に係る事務量の削減と確認調査に使用する重機のコスト削減を目的とし、効率的な事業の運営を図ったものであった。

平成20年度以降は、今まで実施してきた「遺跡調査会方式」を廃止し、新規事業から「市直営方式」の導入を開始した。つまり、志木市では、個人及び民間による各種開発に伴う発掘調査（個人住宅建設を除く）については、今まで志木市遺跡調査会を発足させ、実施してきたが、職員の派遣や手続法などによる問題点を考慮し、平成20年度以降の新規事業からは、市直営による受託事業として実施することになった。

最後に本報告で掲載する平成18・19年度の調査内訳について以下にまとめることにする。

平成18年度は、29件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調

査は3件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は7件であった。なお、盛土保存を適用したのは9件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅9件、共同住宅7件、分譲住宅6件、保育園1件、福祉施設1件、倉庫及び木工作业所1件、道路新設工事1件、公園造成1件、駐車場1件、開発計画策定1件である。

平成19年度は、25件の確認・発掘調査等を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は2件で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は4件であった。なお、盛土保存を適用したのは10件であった。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅11件、分譲住宅7件、共同住宅2件、福祉施設1件、宅地造成3件、境界ブロック工事1件である。

【註】

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原伸右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻國雜記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのびし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

- 神山健吉 1988 「『廻國雜記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 田子山遺跡第93地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は約15m、低地との比高差は約10mである。

遺跡の周辺を眺めると、北側は際立った断崖地形になっており、その先には新河岸川を臨むことができる。また、本遺跡の東側には「谷津地」と呼ばれる、大きな谷が入り込んでおり、この開析谷に面して富士前・大原遺跡が分布している。

遺跡の現況は、古くから個人専用住宅を中心とした小規模住宅が密集している地区であったが、平成5年以降、急速に進められたマンション・分譲住宅建設といった中規模開発によって、より一層宅地化が進行し、畑地・空地がほとんど見られない状況にある。

本遺跡は、昭和63年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、縄文時代草創・早・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世、近代の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成18年4月17日に実施した。調査区長軸はほぼ東西方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、奈良・平安時代の住居跡4軒と思われる遺構が確認された。そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行ったが、地盤改良を行うということで盛土保存は不可能であるという回答を得た。そのため、平成18年4月24日から発掘調査を実施することに決定した。

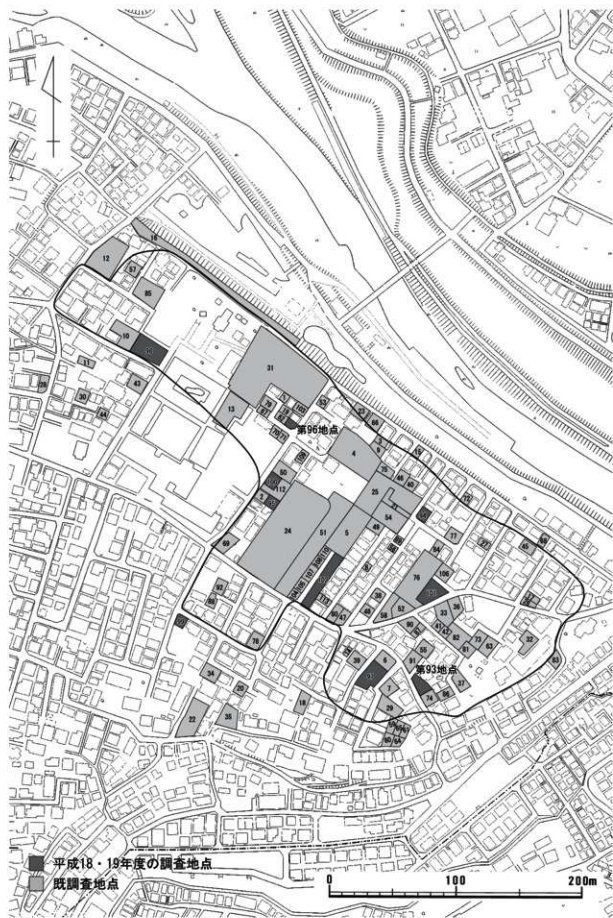
以下、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第4表の発掘調査工程表に示した。

4月24日 重機による表土剥ぎ作業を開始した。同時に調査区内には残土置場が確保できないことから、残土をダンプに積載し、調査区外に搬出することにした。

25日 残土搬出作業は本日で終了した。同時に人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入

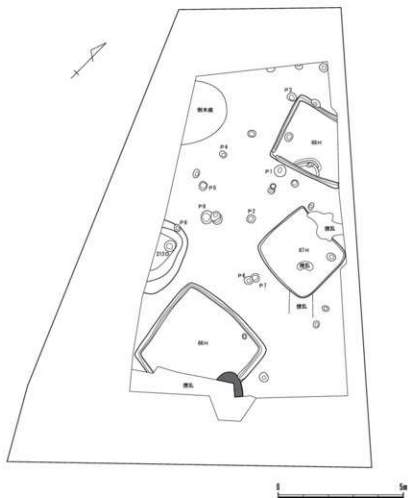
	平成18年4月			5月		
	20日	28日	30日	1日	5日	15日
表土剥ぎ作業	4.24					
66H	4.26		5.1		5.9	
67H		4.28	5.1			
68H			5.1		5.8	
213D					5.8	
器材片付け作業						5.12

第4表 田子山遺跡第93地点の発掘調査工程表



第3図 田子山遺跡の調査地点 (1/3000)

平成21年7月31日現在



第4図 遺構分布図 (1/150)

後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、検出された遺構は、縄文時代の土坑数基と平安時代の住居跡3・4軒と思われた。

- 4月下旬 平安時代の住居跡は3軒(66H~68H)と判明した。そのうちの2軒(66・67H)の精査を行った。66Hは攪乱により遺存状態は良くなかったが、比較的多くの土器が出土した。66Hの時期は、9世紀中葉~後葉であろう。
- 5月上旬 66・67Hの精査に併行して、68Hの精査を開始した。68Hの時期は、出土した須恵器坏の底部に回転糸切り痕を残すものと周辺へラ削り調整が施されるものが共存することから、66・67Hより古い様相であり、8世紀末葉~9世紀前葉に比定される。
- また、縄文時代の土坑は、当初、数基と思われたが、そのうちの1基は、倒木痕であることが判明した。縄文時代の土坑は、1基(213D)だけを命名した。
- 5月12日 213Dのセクション図を終了し、本日をもって調査を終了する。午後からは器材搬出作業を行う。なお、今回は埋戻し作業はなし。

第2節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構は、調査区南端から検出された土坑1基(213D)である。なお、当初に縄文時代の土坑と考えていた北西端のものについては、土層が天地逆転している状況を確認したため、倒木痕と判断した。

(2) 土坑

213号土坑

遺構 (第5図)

〔構造〕 後世のビットに切られる。西側は調査区外のために詳細不明である。坑底はほぼ平坦で、壁面は中位から上部が開き、北側はテラス状に段をもつ。(平面形) 方形?。(規模) 確認できた最長で約300cm。(長軸方位) 不明。(深さ) 80cm。(覆土) 11層に分層された。橙色スコリアを含む層が検出されている。

〔遺物〕 早期の撚糸文系・条痕文系の土器小破片が出土した。

〔時期〕 早期か?

〔所見〕 出土遺物から遺構の時期は早期と思われるが、坑底付近からの出土遺物は乏しく、流れ込みの遺物の可能性がある。

遺物 (第6図、第5表)

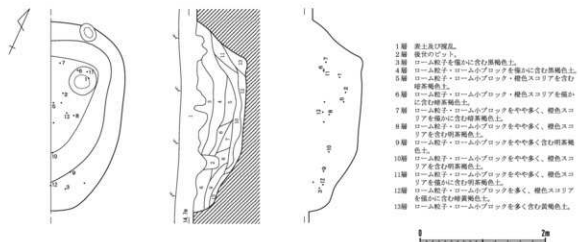
1～6は早期前葉の撚糸文系土器の小破片で、詳細な型式名は不明である。Rの縄文を施文する5を除き、他はLの撚糸文が施文される。6の撚糸文は施文の向きが不定である。

7～13は早期後葉の条痕文系土器の胴部小破片である。7・8は野島式土器で、微隆起線による曲線文が施文される。その他は貝殻条痕文のみを施文し、型式名は不明である。

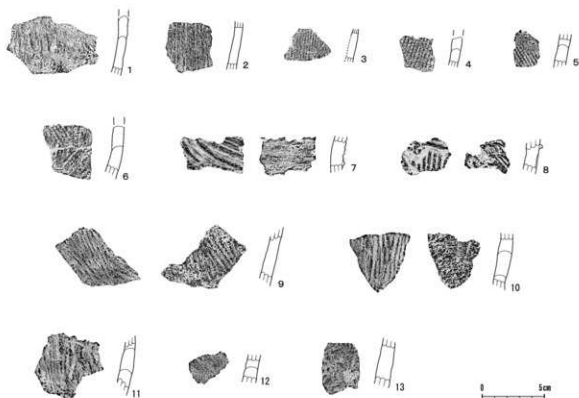
検出番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物				備考
					石	角	礫	砂	
第6図1	胴	撚糸文?	明褐色	撚糸文系?	○	○	○		表面風化著しい
第6図2	胴	撚糸文L/原体の間隔は原体の太さと同～広	褐色	撚糸文系	○		○		砂は粗粒
第6図3	胴	撚糸文L/原体の間隔は原体の太さより狭	明褐色	撚糸文系	○	○	○		
第6図4	胴	撚糸文L/原体の間隔は原体の太さより狭	赤褐色	撚糸文系					
第6図5	胴	縄文R	暗褐色	撚糸文系			○	白	
第6図6	胴	撚糸文L/原体の間隔は原体の太さと同	明赤褐色	撚糸文系			○		
第6図7	胴	微隆起線による曲線文/沈線文	赤褐色	野島		○	○	織	
第6図8	胴	微隆起線による曲線文/沈線文	黒褐色/内面:褐色	野島		○		織	
第6図9	胴	貝殻条痕文	黒褐色/内面:褐色	条痕文系			○	織・白	
第6図10	胴	貝殻条痕文	暗褐色	条痕文系		○	○	織・白	
第6図11	胴	貝殻条痕文	赤褐色/内面:黒色	条痕文系		○		織	
第6図12	胴	貝殻条痕文	暗赤褐色	条痕文系			○	織・白	条痕はごく浅い
第6図13	胴	貝殻条痕文	暗赤褐色	条痕文系		○	○	織	細粒は片岩

☆ 石:石英 角:角閃石・輝石 礫:細礫 砂:砂粒 織:織理 白:白色粒子

第5表 213号土坑出土遺物一覧



第5図 213号土坑(1/60)



第6図 213号土坑出土遺物(1/3)

第3節 平安時代の遺構・遺物

(1) 概要

平安時代の遺構については、住居跡が3軒（66～68H）検出された。住居跡の時期は、66Hは9世紀中葉～後葉、67Hは9世紀後葉～末葉、68Hは8世紀末葉～9世紀前葉に比定される。

また、調査区内からビッドが検出されたが、そのうちの9本（P1～9）については、平安時代のものと考えられる。

(2) 住居跡

66号住居跡

遺構（第7・8図）

〔住居構造〕住居南側は攪乱により壊されている。（平面形）方形。（規模）4.20×4.18m。（壁高）24～30cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲ではカマドを除いて巡らされていた。上幅17～27cm・下幅4～8cm・深さ5～13cmを測る。（床面）カマドの前面が良く硬化していた。床面はほぼ直床である。（カマド）東壁に位置するが、かなりの部分が壊されているため詳細は不明である。主軸方位はほぼE-W。袖部と天井部は粘土で構築されていたと思われるが、粘土の残りは良くなかった。カマドの奥から支脚が正置の状態出土した。（柱穴）支柱穴と思われるものは検出されなかった。（覆土）8層に分層された。

〔遺物〕須恵器杯・甕形土器、土師器甕形土器、灰軸陶器、土製品、鉄製品が出土した。

〔時期〕平安時代（9世紀中葉～後葉）。

遺物（第9図、第6表）

1～3は須恵器杯形土器、4・9～12は須恵器甕形土器、5・6は土師器甕形土器、7・8は灰軸陶器である。

13は土製品で支脚である。下端は欠損する。長さ24.5cm・最大幅12.4cm・最大厚9.5cm・重さ2.0kg。外面はナデ等の調整ではなく、平坦面を呈することから、成形痕と思われる。カマド奥の坑底直上から正置の状態出土した。大型の支脚であり、市内では最大の大きさである。

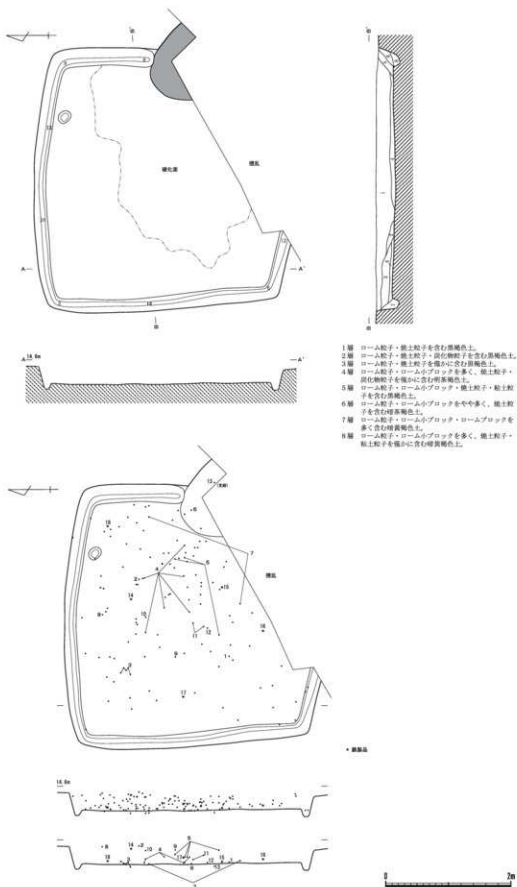
14～18は鉄製品である。

14は長さ2.9cm・幅3.9cm・厚さ0.2cm・重さ7.7g。板状に薄い製品であるが、不明品である。一部折れ曲がっており、上部には突出する箇所も見られる。断面は幾分反っており、裏面と思われる面は僅かに窪んでいる。

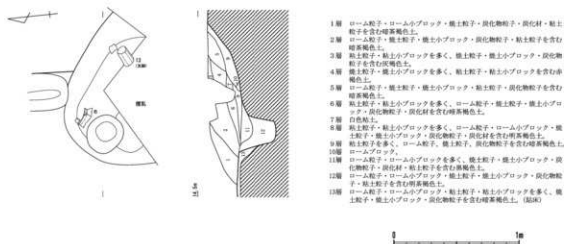
15～18は釘である。

15は長さ8.0cm・頭部厚さ0.4cm・頭部幅1.4cm・頭部奥行1.4cm・身部最大幅0.8cm・身部厚さ0.6cm・重さ20.6g。いわゆる折釘で、頭部から基部にかけて屈曲し、厚さは薄く、身部は肥厚する。断面形は長方形である。先端部がやや丸いが、完形品と思われる。住居跡ほぼ中央の覆土中（床上5cm）からの出土である。

16は長さ7.6cm・最大幅1.1cm・厚さ0.9cm・重さ17.4g。上端部と下端部は欠損する。断面形は長方形である。住居跡南壁寄りの覆土中（床上10cm）からの出土である。



第7図 66号住居跡 (1/60)



第8図 66号住居跡カマド (1/30)

17は長さ7.8cm・頭部幅1.1cm・頭部奥行0.3cm・身部最大幅1.2cm・身部厚さ0.4cm・重さ6.6g。板状に薄い平釘で、下端部は欠損する。住居跡西壁寄りの覆土中（床上15cm）からの出土である。

18は長さ3.4cm・最大幅0.5cm・厚さ0.4cm・重さ1.5g。上端部と下端部は欠損する。断面形は長方形である。北東コーナーの覆土中（床上10cm）からの出土である。

67号住居跡

遺構 (第10図)

〔住居構造〕北壁は半分程が壊されている。(平面形) 隅丸方形。(規模) 2.88×2.70m。(壁高) 7～14cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できなかった。(床面) 図示した部分が硬化していた。ほぼ直床である。(柱穴) 本住居の柱穴は検出されなかった。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕須恵器環形土器、土師器甕形土器が出土した。

〔時期〕平安時代（9世紀後半～末葉）。

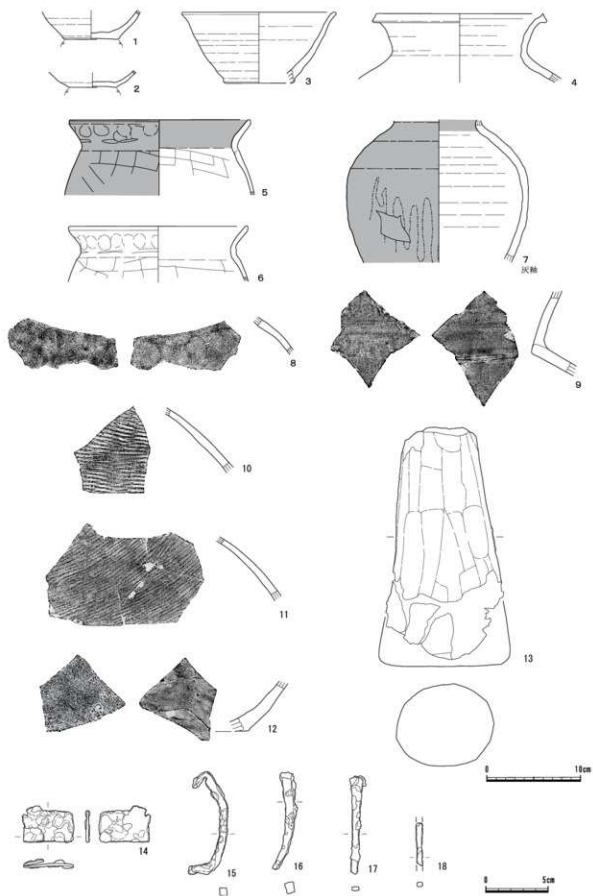
遺物 (図版5-1、第7表)

1・2は須恵器環形土器、3・4は土師器甕形土器である。

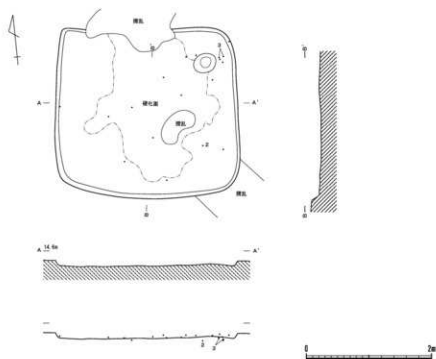
68号住居跡

遺構 (第11図)

〔住居構造〕東側は調査区域外である。(平面形) 長方形。(規模) 不明×2.65m。(壁高) 27～47cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていたが、南西コーナーでは確認できなかった。上幅15～23cm・下幅5～9cm・深さ5～10cmを測る。(床面) 図示した部分が硬化していた。南壁中央付近の床面は6cm程下がっており、その北側の入り口梯子穴付近には3cmほどの凸堤が確認できた。貼床は5～15cm程の厚さで施されていた。(カマド) 北壁から住居内にかけて粘土が



第9図 66号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第10図 67号住居跡 (1/60)

検出され、カマドに使用されたものと考えられるが、壁への掘り込みなどは確認できなかった。(柱穴) 入り口梯子穴と思われる深さ17cmのものが1本検出されたのみである。(覆土) 14層に分層された。

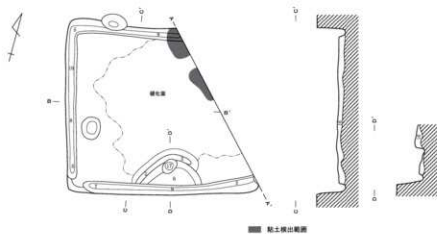
[遺物] 須恵器坏・甕形土器、土師器甕形土器が出土した。

[時期] 平安時代(8世紀末葉～9世紀前葉)。

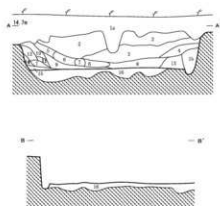
遺物 (第12図、第8表)

1～11は須恵器坏形土器、12・13は土師器甕形土器、14は須恵器甕形土器である。

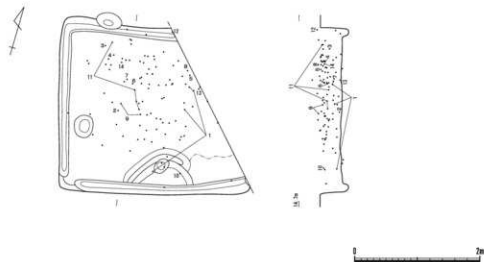
なお、ここでは11を須恵器坏形土器と扱ったが、この土器は内黒磨研土器であり、「ロクロ酸化焙焼成土器群」(書上 1996)に類する。



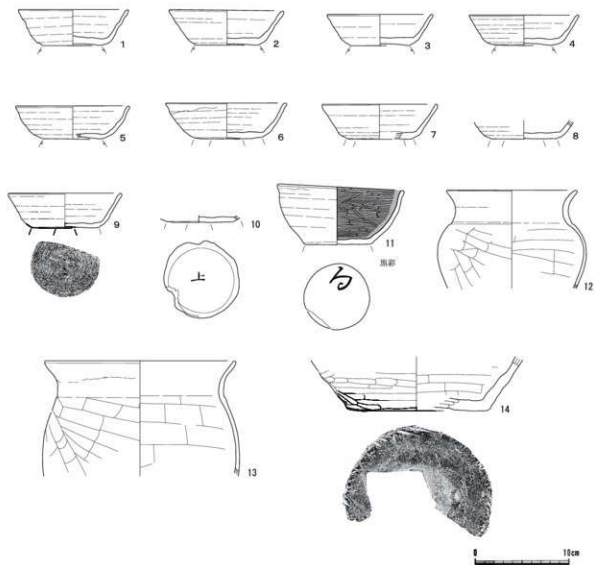
10 粘土検出範囲



- 10層 表土および覆土。
- 11層 雑草のゾーン。
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む褐色土。
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く焼土粒子を僅かに含む褐色腐色土。
- 14層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色腐色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含む褐色腐色土。
- 16層 粘土粒子・粘土小ブロック・粘土ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む灰白色土。
- 17層 白色粘土。
- 18層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色腐色土。
- 19層 粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む褐色腐色土。
- 20層 粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、ローム粒子・焼土粒子を含む褐色腐色土。
- 21層 粘土粒子・粘土小ブロック・ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、粘土粒子を含む褐色腐色土。
- 22層 粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロックを含む褐色腐色土。
- 23層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む褐色腐色土。
- 24層 焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く含む褐色腐色土。
- 25層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、粘土粒子・粘土小ブロック・炭化物粒子を含む褐色腐色土。
- 26層 乱雑。



第11図 68号住居跡 (1/60)



第12図 68号住居跡出土遺物 (1/4)

第4節 遺構外出土遺物

ここでは、表土および攪乱中から出土した遺物に加えて、混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱う。遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器1点と土器26点が出土した。

縄文土器については、早期前葉の燃糸文系土器・後葉の条痕文系土器、前期後葉の諸磯式土器に分類できる。

(1) 縄文時代の石器 (第13図1)

1は閃緑岩製の刃器である。長さ68.09mm・幅126.8mm・厚さ14.67mm・重量89.9gを測る。原礫面には

() は現存値及び推定値

押収番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第9901	須恵器 環	(3.1)	-	(6.0)	体部中位～底部/酸化炎物成	淡褐色	赤褐色粒子・砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕が残る	住居中央からやや西壁寄りのほぼ床面上	体部中位～底部40%
第9902	須恵器 環	(1.8)	-	5.0	体部下下～底部/東金子製品か	濃灰褐色	砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕が残る	住居中央からやや北壁寄りの覆土中(床上30cm)	体部下下～底部60%
第9903	須恵器 環	(7.5)	(16.4)	(7.6)	底部を欠損/口縁部は僅かに外反する/内面には一部平滑面が見られる/東金子製品	濃灰褐色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転	北西コーナー近くのほぼ床面上	口縁部～底部60%
第9904	須恵器 甕	(7.2)	(18.4)	-	口唇端部に面取りがまわる/内面口縁部と外面には自然軸がかかる/東金子製品か	濃灰褐色	白色砂粒を含む	内外面:回転ナデ	住居中央付近の覆土中(床上18cm)	口縁部～胴部上半30%
第9905	土師器 甕	(8.0)	(19.2)	-	口唇端部に凸線がまわる/「く」の字口縁/内面口縁部及び外面は白や赤とされると思われる/いわゆる「武蔵型甕」	明褐色	赤褐色粒子・砂粒を含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ調整/外面口縁部には指頭押捺痕が観察される	住居中央付近の覆土中(床上17～28cm)のやや散在的	口縁部～胴部上半40%
第9906	土師器 甕	(5.8)	(19.0)	-	「く」の字口縁/赤色塗料の付着があるように観察されるため、5の土器同様に内面口縁部及び外面は赤彩される可能性がある/いわゆる「武蔵型甕」	淡茶褐色	砂粒を多く含む	内面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ調整/外面口縁部には指頭押捺痕が観察される	カマド内	口縁部～胴部上半20%
第9907	灰軸 長頸瓶	(15.4)	-	-	灰軸陶器/最大径は胴部/胴部推定19.0cm/外面胴部上半～下半にかけて自然軸がかかる/内面には黒色の付着物(タール状)	胎土は灰褐色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ成形/灰軸は内面胴部及び外面に施される	カマド左から前面にかけての覆土中(床上6・12cm)の散在的	胴部～胴部下半の破片
第9908	灰軸 長頸瓶	-	-	-	灰軸陶器/胴部/自然軸がかかる/猫伏製品か	胎土は灰白色	白色砂粒を含む	内面には指頭によるものか押捺痕が観察される/灰軸は外面に施される	北壁近くの覆土中(床上29cm)	胴部の破片
第9909	須恵器 甕	-	-	-	胴部は「く」の字状に屈曲/胴部と胴部の境に接合痕が観察される	灰褐色	白色砂粒・小石を含む	内面:頸部は回転ナデ、胴部はナデ/外面:頸部は回転ナデ、胴部はナデか、平行叩き目痕が残る/平行叩き目痕が斜行する細線1条が観察されるか、ヘラ痕文か	住居中央からやや西壁寄りの覆土中(床上32cm)	胴部～胴部上半の破片
第9910	須恵器 甕	-	-	-	胴部上半の破片	灰褐色を基調/内面は暗褐色	白色砂粒を含む	内面:当て道具痕/外面:平行叩き目痕	住居中央からやや北壁寄りの覆土中(床上21cm)	胴部上半の破片
第9911	須恵器 甕	-	-	-	胴部上半の破片	灰褐色	白色砂粒を含む	内面:当て道具痕/外面:平行叩き目痕	住居中央の覆土中(床上7・14cm)	胴部上半の破片
第9912	須恵器 甕	-	-	-	胴部下半～底部破片/底部が僅かに残存	灰褐色	白色砂粒・小石をやや多く含む	内外面:ナデ/内面は指頭によるナデと思われる	住居中央の覆土中(床上6cm)	胴部下半～底部の破片

第6表 66号住居跡出土遺物一覧

押収番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
図版5-1-1	須恵器 環	(1.7)	-	-	体部下下～底部/酸化炎物成か/東金子製品か	淡灰色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕が残る	覆土中	体部下下～底部の小破片
図版5-1-2	須恵器 環	(1.0)	-	-	底部/東金子製品か	淡黄褐色を基調	砂粒・小石を僅かに含む	ロクロ回転は右回転/底部に回転糸切り痕が残る	南東コーナー近くの床面上	底部小破片
図版5-1-3	土師器 甕	(5.5)	-	-	口縁部～胴部上半/口縁部は屈曲せず緩やかに外反/いわゆる「武蔵型甕」	暗褐色	砂粒を多く、黄褐色粒子・黄褐色角四石を含む	内面:横ナデ/外面:口縁部は横ナデ、以下は横方向のヘラ削り	北東コーナー近くの床面上	口縁部～胴部上半の破片
図版5-1-4	土師器 甕	-	-	-	胴部～胴部上半/胴部が膨らむタイプのため小型薬か	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:横ナデ(回転ナデ)角四石・砂粒を含む	覆土中	胴部～胴部上半の破片

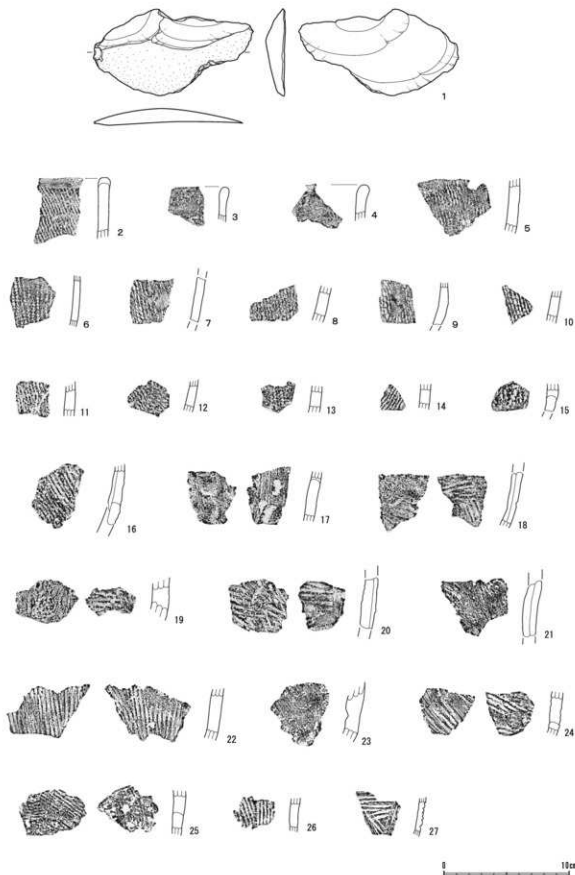
第7表 67号住居跡出土遺物一覧

(単位: cm)

標記番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第12821	須恵器 環	3.8	11.7	6.2	底部から口縁部にかけて直線的に開く／口唇部はやや尖る／ロクロによる稜が強い／東金子製品	灰褐色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	覆土中（床土7～14cm）から散在的	ほぼ完形品
第12822	須恵器 環	3.7	12.2	6.7	底部から口縁部にかけて直線的に開く／東金子製品	灰褐色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央からやや西壁寄りのほぼ床面上	80%
第12823	須恵器 環	3.3	(11.2)	6.3	底部から口縁部にかけて直線的に開く／全体に酸化炭焼成／東金子製品	淡茶褐色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	北西コーナーの覆土中（床土24cm）	50%
第12824	須恵器 環	3.3	(11.7)	5.8	底部から口縁部にかけて直線的に開く／東金子製品か	濃灰褐色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	北西コーナーの覆土中（床土17cm）	50%
第12825	須恵器 環	3.5	12.2	6.0	口縁部は僅かに外反する／畑山製品	灰褐色	白色針状物質を僅かに含む	ロクロ回転は右回転／底部に回転糸切り痕が残る	住居中央からやや北東寄りの覆土中（床土33cm）	50%
第12826	須恵器 環	4.8	12.8	7.2	口縁部は僅かに外反する／畑山製品	灰白色	白色針状物質・白色砂粒をやや多く含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へう割り調整、中心部は回転糸切り痕が残る	住居中央からやや北西コーナー寄りの覆土中（床土20cm）	完形品
第12827	須恵器 環	3.7	(12.2)	(6.8)	底部から口縁部にかけて直線的に開く／底部付近やや酸化炭焼成／東金子製品か	淡灰色	白色砂粒・小石を含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へう割り調整か	住居中央からやや北西コーナー寄りのほぼ床面上	20%
第12828	須恵器 環	(2.0)	—	7.0	体部下半～底部破片	灰褐色	白色砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へう割り調整、中心部は回転糸切り痕が残る	住居中央からやや北東寄りの覆土中（床土33cm）	体部下半～底部30%
第12829	須恵器 環	3.7	(12.0)	7.2	底部から口縁部にかけて直線的に開く／内面及び外面口縁部に自然釉／底部に火摩痕／底部に割書あり／割書は「十」か／東金子製品か	灰褐色	白色砂粒・小石をやや多く含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へう割り調整、中心部は回転糸切り痕が残る	住居中央からやや西壁寄りの床面上（床土120・34cm）	40%
第128210	須恵器 環	(0.8)	—	7.0	底部破片／底部に墨書文字あり／文字は「上」	灰褐色	白色針状物質白・砂粒をやや多く含む	ロクロ回転は右回転／底部は周辺へう割り調整、中心部は回転糸切り痕が残る	南壁近くの覆土中（床土35cm）	底部のみ100%
第128211	須恵器 環	6.4	13.4	7.0	内裏磨研土器／口縁部は短く外反する／底部に墨書文字あり／文字は「る」か「成」か「為」か／いわゆる「ロクロ酸化焙焼成土器群」	内面：黒色／外面：淡茶褐色	白色針状物質を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	ロクロ回転は右回転／内面はていねいにへう割り調整／底部はほぼ全面に回転へう割り調整が施されるが、僅かに回転糸切り痕が残る	北西コーナー付近の覆土中（床土20～29cm）から散在的	70%
第128212	土師器 甕	(10.3)	(13.8)	—	小型甕／口縁部は弓状を呈する／口縁部はやや厚め／いわゆる「武蔵型甕」	暗茶褐色	砂粒を多く、角四石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はへう割り	北壁際の覆土中（床土29cm）	口縁部～胴部40%
第128213	土師器 甕	(12.2)	(20.2)	—	口縁部はやや受け口状を呈し、全体に「コ」の字口縁の痕し／いわゆる「武蔵型甕」	暗茶褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はへう割り	住居中央からやや北壁寄りの床面上（粘土採取範囲内）	口縁部～胴部40%
第128214	須恵器 甕	5.8	—	(15.0)	底部中央はやや上底状／底部には網代状の圧痕あり	灰褐色	白色砂粒・砂粒をやや多く含む	内外面：ナデ	住居中央からやや北西コーナー寄りの覆土中（床土23cm）	胴部下半～底部40%

(単位：cm)

第8表 68号住居跡出土遺物一覧



第13図 遺構外出土遺物 (1/3)

神図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	粘土混入物					出土位置	備考
					石	角	礫	砂	他		
第13図2	口縁	口唇部やや肥厚／縄文R	暗褐色	夏島or稲荷台	○	○		○		67H	
第13図3	口縁	口唇部肥厚／無文	褐色	稲荷原	○			○		68H	
第13図4	口縁	口唇部肥厚／縄文L?文様不鮮明	明褐色	稲荷台?				○	○		遺構外
第13図5	胴	縄文L／原体の間隔は原体の太さより狭	明赤褐色	縄文系	○			○		68H	
第13図6	胴	縄文L／原体の間隔は原体の太さと同	赤褐色	縄文系	○	○		○		68H	
第13図7	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さと同	明赤褐色	縄文系				○		66H	
第13図8	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さと同	灰赤褐色／内面：黄褐色	縄文系				○		68H	
第13図9	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さより狭／施文の間は隔広い	灰黄褐色	縄文系				○			遺構外
第13図10	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さと同	灰黄褐色	縄文系				○		68H	
第13図11	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さと同	明赤褐色／内面：黒褐色	縄文系				○		66H	
第13図12	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さと同	明赤褐色／内面：灰褐色	縄文系				○			遺構外
第13図13	胴	縄文／原体の間隔は原体の太さより狭	明赤褐色／内面：灰褐色	縄文系				○		66H	
第13図14	胴	縄文R	明赤褐色／内面：黒褐色	縄文系				○	○	67H	
第13図15	胴	縄文R／原体の間隔は原体の太さと同／摺り粗い	明褐色	縄文系				○		66H	
第13図16	胴	貝殻条痕文	赤褐色／内面：暗褐色	条痕文系				○	織	66H	
第13図17	胴	貝殻条痕文／内面に隠状工具による幅広の沈線文	暗褐色／内部：黒色／内面：灰褐色	条痕文系				○	織	66H	
第13図18	胴	貝殻条痕文	明赤褐色／内面：褐色	条痕文系				○	織	66H	
第13図19	胴	貝殻条痕文	明赤褐色／内面：明褐色／	条痕文系				○	織	68H	
第13図20	胴	貝殻条痕文	明赤褐色／内面：暗灰色	条痕文系				○	織		遺構外
第13図21	胴	貝殻条痕文	赤褐色／内面：黒褐色	条痕文系				○	織	67H	織量少ない
第13図22	胴	貝殻条痕文	暗赤褐色	条痕文系				○	織	66H	
第13図23	胴	貝殻条痕文（不鮮明）	明褐色／内面：灰色	条痕文系				○	織	68H	
第13図24	胴	貝殻条痕文	赤褐色／内面：黒褐色	条痕文系				○	織		遺構外
第13図25	胴	貝殻条痕文	赤褐色／内面：灰褐色	条痕文系				○	織	68H	
第13図26	胴	貝殻条痕文	暗灰褐色	条痕文系				○	織	68H	
第13図27	胴	半截竹管による沈線文／内面赤彩か?	明褐色／内面：赤褐色	諸磯c				○		68H	

○ 石：石英 角：角閃石・輝石 礫：細礫 砂：砂粒 織：織埋

第9表 遺構外出土の縄文土器一覧

有色鉱物が風化したものと思われる、鉄錆に似た赤褐色の付着物が認められる。

(2) 縄文時代の土器 (第13図2～27、第9表)

縄文時代の土器は、後世の遺構から出土したものが大半を占めた。時期は早期のものが殆どで、前葉の燃系文系土器、後葉の条痕文系土器が出土し、それ以外は前期後葉の諸磯式土器が1点出土したのみであった。

志木市内での燃系文系土器の出土は、田子山遺跡に特徴的なもので、他には城山・新邸遺跡の各遺跡で破片が数点出土しているにとどまる。

2～16は燃系文系土器の破片である。口縁部の破片は2～4でそれ以外は胴部破片である。型式は多くが不明で、原体はRのものがやや多い。

17～26は条痕文系土器の胴部破片で、文様はすべて貝殻条痕文が施文される。

27は諸磯c式土器の破片である。文様は半截竹管による沈線文が施文される。

第3章 田子山遺跡第96地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第2章第1節 参照。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成19年7月9日に実施した。調査区の長軸方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、平安時代の土坑1基と縄文時代の土坑1基と思われる遺構を検出した。

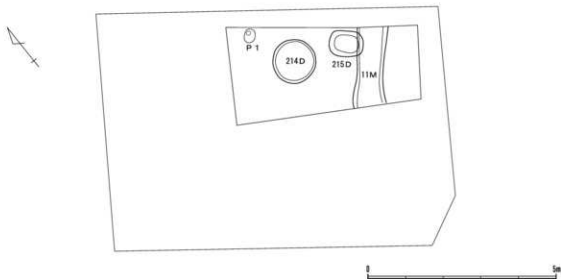
そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、当初は盛土保存を検討していたが、その後、床下収納庫を予定している部分で保存層を確保できないということであり、盛土保存は不可能であるという回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

発掘調査は、表土剥ぎ作業から埋戻し作業に至るすべての作業を8月20日の一日で完了した。以下に調査の経過を説明する。

午前9時、バックホーを使用し、表土剥ぎ作業を開始する。同時に器材搬入作業を行い、人員導入による発掘調査を開始した。表土剥ぎ作業の終了後は、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を行った。

その結果、調査区内には、縄文時代の土坑1基(215D)、平安時代の土坑1基(214D)、古墳時代後期～平安時代の溝跡1本(11M)、その他としてピット1本が分布していることが判明した。

その後、すべての遺構の精査を開始し、実測・写真撮影を終了した。同日には、器材搬出作業及び片付けを終了する。併行して、埋戻し作業を終了し、すべての調査を完了した。



第14図 遺構分布図(1/100)

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

本地点からは、縄文時代の土坑1基(215D)、平安時代の土坑1基(214D)、古墳時代後期～平安時代の溝跡1本(11M)が検出された。また、平安時代以降のものと思われるビッドが1本検出された。

(2) 土坑

214号土坑

遺構 (第15図)

[構造] (平面形) 円形。(規模) 直径115cm。(深さ) 23cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 2層に分層される。

[遺物] 須恵器環形土器、土師器甕形土器の小破片が覆土中から僅かに出土した。

[時期] 平安時代(9世紀後葉か)。

遺物 (図版6-7)

須恵器環形土器(1・2)

1は体部小破片で、色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。外面には指紋が観察される。

2は体部下半から底部にかけての小破片で、色調は青灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を僅かに含む。

ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。

土師器甕形土器(3～5)

3は口縁部小破片で、色調は淡茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子を僅かに含む。内外面に横ナデが施される。4は胴部の小破片で、色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。5は胴部の小破片で、色調は淡茶褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。

215号土坑

遺構 (第15図)

[構造] 11Mに切られる。(平面形) 隅丸方形。(規模) 92×68cm。(長軸方位) N-45°-E。(深さ) 71cm。(覆土) 上層がローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土から観察して縄文時代と思われる。

(3) 溝跡

11号溝跡

遺構 (第16図)

[構造] (規模) 確認できた範囲では、長さ210cm・上幅78～83cm・下幅50～65cmを測る。(走行方位) N-40°-W。(深さ) 14cm。(覆土) 3層に分層された。

[遺物] 須恵器環・甕形土器の小破片2点が出土した。

[時期] 古墳時代後期(7世紀後葉)～平安時代。

[所見] 1は湖西製品の須恵器環身(湖西Ⅱ期後半～Ⅲ期)と考えられることから、7世紀後葉に比定される。しかし、2は胎土に白色針状物質を含むことから、鳩山製品と考えられ、8・9世紀以降に比定される可能性がある。そのため、ここでの時期は、ひとまず古墳時代後期～平安時代としたが、今回の遺物については、須恵器環身・須恵器甕形土器の僅か2点という良好とは言えない状況であることから、時期の決定については今後の調査に期待することにしたい。

遺物 (第16図)

1は須恵器環身形土器の蓋受部から底部にかけての小破片である。色調は灰褐色を呈し、胎土は精練され、僅かに砂粒を含む程度である。底部周辺には回転ヘラ削り調整が施される。覆土中からの出土である。湖西製品(Ⅱ期後半～Ⅲ期)と考えられる。

2は須恵器甕形土器の胴部小破片である。色調は灰色を呈し、胎土には白色針状物質・白色砂粒・小石を含む。内面には無文の当て道具痕、外面には平行叩き目痕が残る。北端の覆土中(坑底上8cm)からの出土である。鳩山製品であろう。

(4) ビット

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 37×28cm。(深さ) 42cm。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土から観察して、平安時代以降か。

(5) 遺構外出土遺物 (第17図)

ここでは、表土・攪乱中から出土した遺物、遺構内からの出土ではあるが時代的に遺構に伴わない混入品と思われる遺物を遺構外出土遺物として扱う。遺構外出土遺物としては、縄文時代の土器、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器、平安時代の土器が僅かに出土した。

1. 縄文時代の土器 (1～3)

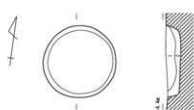
1は鉢の胴部破片で、文様は縄文LRのみの粗雑な施文がされている。下部はミガキが施される。赤褐色を呈し、胎土には砂粒・褐色粒子を含む。後期前～中葉のものと思われる。

2は深鉢の口縁部小破片で、口唇部は内側に屈曲し、上面は平らに成形されている。無文で表面は平滑に調整されている。色調は褐色で、口唇部上面のみ黒色を呈する。胎土には砂粒を含む。称名寺式であろうか。

3は深鉢の胴部小破片で、沈線文と刺突文が施文されている。色調は明褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。称名寺Ⅱ式もしくは堀之内Ⅰ式と思われる。

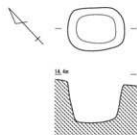
2. 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器 (4)

内外面に赤彩が施されることから、鉢形土器の体部下半から底部にかけての破片と思われる。現器高2.5cm・推定底径5.4cm。底部はやや上底状に窪んでいる。胎土の色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には黄褐色粒子・角閃石・砂粒を含む。内外面はヘラ磨き調整が施される。



- 1層 ローム粒子・ローム小ブロックを
層状に含む赤褐色土。
2層 ローム粒子を層状に含む黒褐色土。

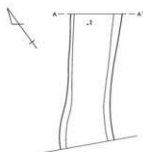
214号土坑



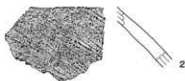
215号土坑



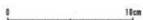
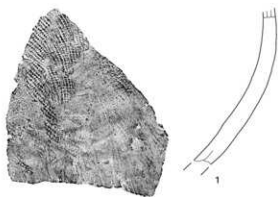
第15図 土坑 (1/60)



- 1層 表土。
2層 ローム粒子を層状に含む黒褐色土。
3層 ローム粒子・ローム小ブロックを
層状に含む赤褐色土。
4層 ローム粒子・ローム小ブロックを
含む黒褐色土。



第16図 11号溝跡・出土遺物 (1/60・1/3)



第17図 遺構外出土遺物 (1/3)

3. 平安時代の土器（5・6）

5は須恵器環形土器である。現器高1.7cm・推定底径5.6cm。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には角閃石・砂粒を僅かに含む。ロクロ回転は右回転である。底部には回転糸切り痕が残るが、僅かにへら書きあるいは刻書されたような痕跡が観察される。体部下半から底部にかけて1/2程遺存する。時期は9世紀後葉～末葉であろう。

6は土師器甕形土器の口縁部から胴部上半にかけての小破片で、小型甕であろう。現器高3.2cm。口縁部は「く」の字状を呈し、外面口唇部直下には弱い沈線が1条まわる。内面には輪積み痕が顕著に残る。色調は淡橙色を呈し、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子を僅かに含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、外面胴部は横方向のへら削り調整が施される。時期は9世紀中葉～後葉であろうか。

第4章 西原大塚遺跡第137地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に存在する遺跡で、東武東上線志木駅の1km程西方に位置している。本遺跡は、北東-南西方向に約700m、北西-南東方向に約150mほどの広がりを持ち、面積約163,930㎡を有する市内最大規模の遺跡である。

遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は南端で約19m、北端で約14mを測る。崖線部は西側でゆるやかな傾斜地になっているが、北西側では際立った断崖地形に変化している様子が観察される。

遺跡の現況は、平成5年度以降に実施されてきた、西原特定土地地区画整理事業に伴い、道路部分の発掘調査が急ピッチに遂行されてきた。現在では、この事業に伴う発掘調査は、平成18年度に完了したが、道路の完成に伴い、新たに個人住宅・共同住宅建設などの小・中規模開発が急増始めている。これにより、本遺跡の調査件数は、平成21年8月時点で、158地点を数え、市内最多の調査件数となっている。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

(2) 発掘調査の経過

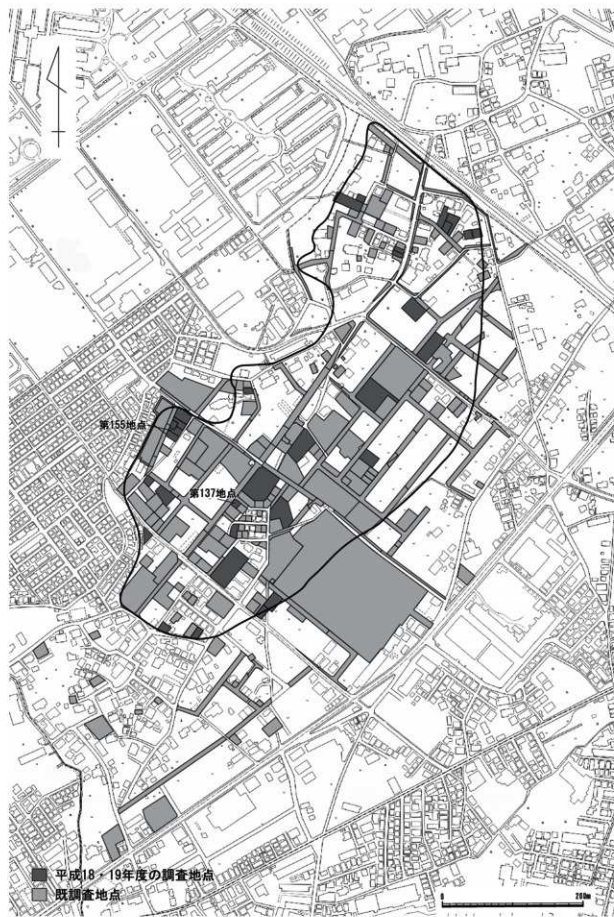
確認調査は、平成18年11月9日に実施した。調査区に合わせ2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代の住居跡1軒と近世以降の溝跡1本と思われる遺構を確認した。

そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、当初は盛土保存を検討していたが、その後、ビルトインの駐車場部分での高低差の関係で保護層を確保することは不可能であるという回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

発掘調査は、表土剥ぎ作業から遺構精査までの作業を11月14日の一日で完了した。以下に調査の経過を説明する。

午前9時、バックホーを使用し、表土剥ぎ作業を開始する。同時に器材の積載及び器材搬入作業を行う。残土置場は遺構が確認できなかった調査区西半部を当てることにした。さらに表土剥ぎ作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始し、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区内には、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡1軒(532Y)と縄文時代～弥生時代以降のピット5本(P1～P5)が分布していることが判明した。確認調査の際に近世以降の溝跡1本と思われる遺構は、根切り溝の可能性があるため、攪乱として扱うことにした。

その後、532Yとピットの精査を開始し、実測・写真撮影を終了した。同日には、器材搬出作業及び片付けを終了し、すべての調査を完了した。埋戻し作業は翌15日に完了した。



第18図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5000)

平成21年7月31日現在

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

本地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡1軒（532Y）と縄文時代～弥生時代以降のビット5本（P1～P5）が検出された。また、遺構外出土遺物として、縄文時代中期後葉の土器破片2点が出土した。

(2) 住居跡

532号住居跡

遺構（第20図）

〔住居構造〕南東側は調査区域外であり、南西側は攪乱に壊されているため詳細は不明である。（平面形）隅丸方形か。（規模）不明。（壁高）15～24cm。壁は急斜に立ち上がる。（床面）壁際を除いてよく硬化していた。（炉）北壁から1m程南に位置する。76×63cmの楕円形で、中央が5cm程窪んだ地床炉である。炉床は焼けて赤化していた。（柱穴）北壁に接する床面下から1号ビット（P1）が検出されたが、本住居に伴うものかは不明である。（覆土）9層に分層される。

〔遺物〕覆土中より壺・甕形土器の小破片3点と石製品2点が出土した。

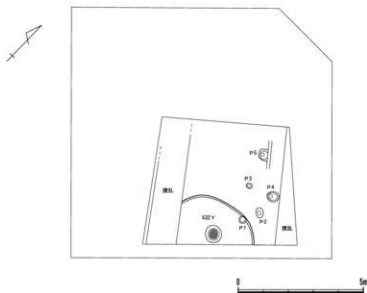
〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺物（第21図）

1～3は土器である。すべて覆土中からの出土である。

1は内外面に赤彩が施されることから、鉢形土器の頸部から体部にかけての小破片と思われる。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はへう磨き調整、外面はハケ目調整後へう磨き調整が施される。

2は壺形土器の口縁部小破片で、口縁部は幅狭の複合口縁を呈し、複合部下端にはハケ状工具による



第19図 遺構分布図（1/150）

刻み目がまわる。色調は黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面はハケ目調整が施される。

3は甕形土器の口縁部小破片で、口唇部外面にはハケ状工具による刻み目がまわる。外面口縁部には僅かに有段になっているが、輪積みによるものと思われる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内外面はハケ目調整が施される。

4・5は石製品で、いずれも砥石と思われる。

4は長さ5.7cm・最大幅5.6cm・厚さ2.9cm・重さ126g。断面は長方形を基本とする。使用面は上面及び左側面を除いた四面であり、最も使用された面は表面で、中央付近は擦れて幾分窪んでいる。石質は砂岩である。北西コーナー近くの床面上からの出土である。

5は長さ4.3cm・最大幅5.3cm・厚さ2.4cm・重さ63g。上面の大部分を欠損する。4と比べ断面形は中央付近がやや膨らみ、側面及び下面は比較的に平坦である。石質は砂岩である。覆土中からの出土である。

(3) ビット

1号ビット

遺構 (第19・20図)

[構造] (平面形) ほぼ円形。(規模) 径27cm。(深さ) 45cm。(覆土) ローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 縄文～弥生時代と思われる。

[所見] 532Yの北壁に接する床面下から検出されたが、532Yに伴うものかは不明である。

2号ビット

遺構 (第19図)

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 40×30cm。(深さ) 16cm。(覆土) ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

3号ビット

遺構 (第19図)

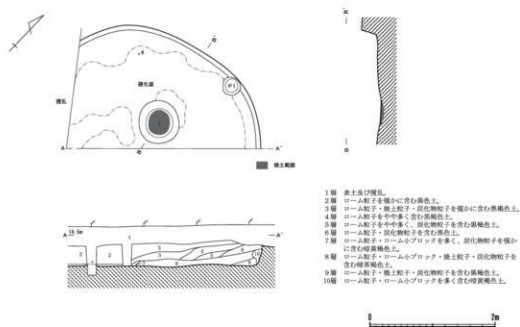
[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 25×20cm。(深さ) 22cm。(覆土) ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

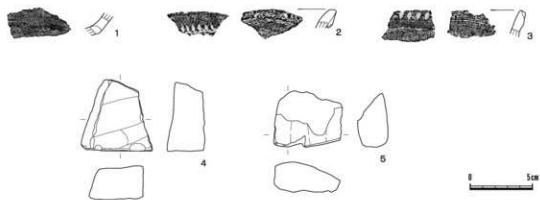
[時期] 覆土の観察から縄文時代と思われる。

4号ビット

遺構 (第19図)



第20図 532号住居跡 (1/60)



第21図 532号住居跡出土遺物 (1/3)



第22図 遺構外出土遺物 (1/3)

〔構造〕(平面形)楕円形。(規模)48×42cm。(深さ)25cm。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の観察から弥生時代以降と思われる。

5号ピット

遺構 (第19図)

〔構造〕東側は壊されている。(平面形)楕円形か。(規模)不明×46cm。(深さ)39cm。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の観察から弥生時代以降と思われる。

(4) 遺構外出土遺物 (第22図)

遺構外出土遺物としては、縄文時代中期後葉の土器破片2点が出土した。両者とも532Yへの混入品として出土した。

1は加曾利E式土器の胴部破片で、地文の縄文RLに磨消懸垂文が施文される。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面には炭化物が付着する。

2は曾利式土器の胴部破片で、隆帯による蛇行する懸垂文に緩杉状の沈線文が施文される。色調は明赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

第5章 西原大塚遺跡第155地点の調査

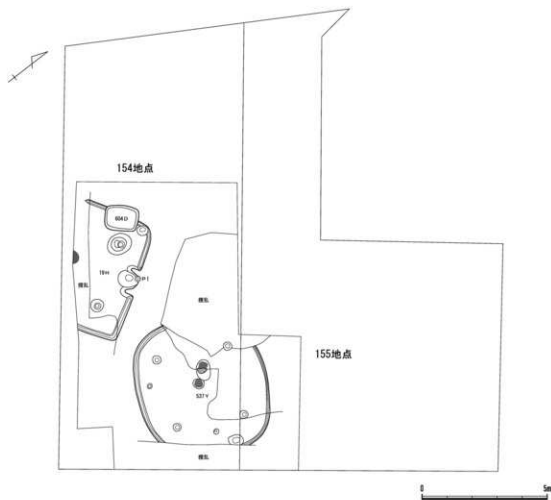
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第4章第1節 参照。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成20年3月11日に実施した。調査区に合わせ2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代の住居跡1軒と思われる遺構を確認した。現地はすでに表土上層部が造成により削平されていると考えられ、遺構の検出には表土がなごに等しい状態であった。検出された住居跡は、床硬化面がすでに露呈している状態であり、遺存状態



第23図 遺構分布図 (1/150)

は良くなかった。なお、この遺構については、すでに3月6日に本地点の南側に隣接する第154地点で確認調査が実施され、本遺構が検出されている。

そのため、ただちに依頼者に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、保護層を確保する余地がない状況であり、当初計画を変更することは不可能であるという回答を得たため、発掘調査を実施することに決定した。

発掘調査は、表土剥ぎ作業から遺構精査までの作業を3月18日の一日で完了した。以下に発掘調査の経過を説明する。

前述した南側に隣接する第154地点の発掘調査は、3月17日から開始することができたため、その進捗状況に合わせ3月18日に実施した。調査内容は、2地点にまたがって検出された同一住居（537Y）の本地点分の精査と実測・写真撮影を行い、本日中に調査を完了した。なお、今回は埋戻し作業はなし。

第2節 検出された遺構・遺物

(1) 概要

本地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡1軒（537Y）が検出された。今回は、開発目的は違うものの本地点の南側に隣接する第154地点の調査中に併行して調査を実施することができた。第154地点分については、すでに調査報告書が完了している（尾形・深井・青木 2008）が、今回の報告では、第154地点の内容を併せて行うものとする。

(2) 住居跡

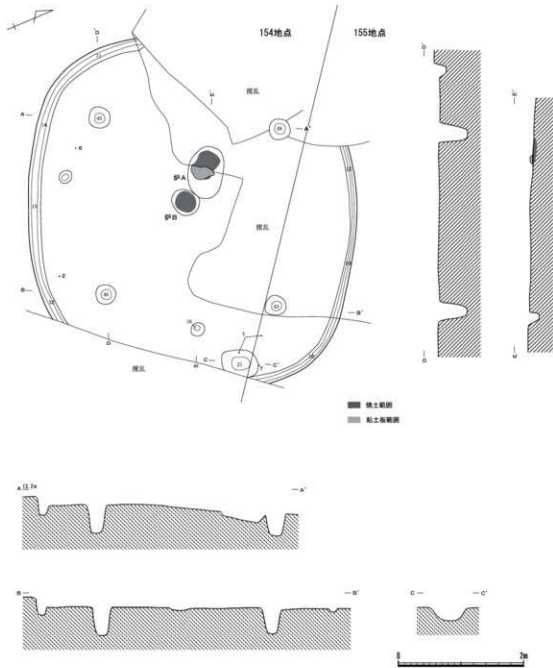
537号住居跡

遺構 (第24図)

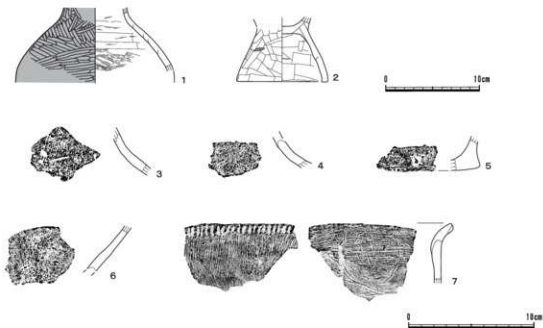
[住居構造] 北側と南側は攪乱により壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 5.60×5.20m。(壁高) 残りの良い所で19cmを測る。(壁溝) 確認できた範囲では巡らされていた。上幅14～20cm・下幅6～8cm・深さ10～14を測る。(床面) 全体的によく硬化している。(炉) 2ヶ所確認できた。Aは住居中央よりやや北西に偏って位置する。北側半分は上層が壊されていた。83×55cmの楕円形を呈し、掘り込みはほとんど確認できなかった。中央付近に40×22cm・厚さ3cmの粘土板が残存していたことから、粘土板炉であったと思われる。粘土板の下は焼けて赤化していた。Bは住居のほぼ中央に位置する。46×40cmの楕円形を呈し、中央が6cm程窪んだ地床炉である。炉床は焼けて赤化している。(柱穴) 主柱穴は4本で、深さは43～49cmを測る。住居東側の深さ16cmのものは、入口梯子穴と思われる。(貯蔵穴) 南東壁の東コーナー寄りに位置する。平面形は隅丸方形で、56×45cm・深さ21cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 壺・甕形土器の破片が出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。



第24図 537号住居跡 (1/60)



第25図 537号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第26図 遺構外出土遺物 (1/3)

遺物 (第25図)

今回の報告で加味する遺物としては、第25図7の甕形土器1点のみである。ここでは、1～6についても第154地点の内容をそのまま引用して説明する。

甕形土器 (1・3～5)

1は現器高8.0cm・胴部最大径16.4cm。頸部から胴部にかけては屈曲しないやや細頸タイプで、胴部中位に最大径をもつ。外面は赤彩される。胎土は暗黄褐色を呈し、黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面には部分的にハケ目痕が残るが、内面はヘラナデ、外面は全面ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、頸部から胴部中位にかけてを30%程遺存する。

3・4は頸部から胴部上半にかけての小破片である。3は色調が暗橙色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面は剥落し遺存状態が悪いが、ヘラ磨き調整であろう。外面はハケ目調整後ヘラ磨き調

整が施される。4は色調が暗褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。いずれも外面が赤彩され、覆土中からの出土である。

5は底部小片である。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面はハケ目調整が施される。貯蔵穴内からの出土である。

甕形土器（2・6・7）

2は台付甕の脚台部である。現器高6.8cm・底径9.6cm。「ハ」字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内外面はヘラナデを基本とするが、弱いハケ目痕が見られることからハケナデの類であろう。南コーナー寄りの床面上からの出土で、脚台部を80%程遺存する。

6は胴部小破片である。色調は黒褐色を呈し、内面には煤が付着している。胎土には砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。西コーナー近くの覆土中（床面上10cm）からの出土である。

7は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は外反し、口唇部外面には刻み目がまわる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・黄褐色粒子を含む。内面は口縁部がハケ目調整、胴部はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。貯蔵穴縁の床面上からの出土である。

（3）遺構外出土遺物（第26図）

弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器2点が出土したが、確実に537Yに伴うものと判断できなかったため、遺構外出土遺物として扱った。

1は甕形土器の胴部破片である。外面は赤彩される。胎土の色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。

2は甕形土器の胴部破片である。色調は黒褐色を呈し、胎土には橙色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

第6章 調査のまとめ

本書は、平成18・19年度の国庫補助事業として、確認調査及び発掘調査を実施した成果を収録したものである。ここでは、発掘調査を実施した田子山遺跡第93・96地点、西原大塚遺跡第137・155地点の4地点のうち、比較的資料がまとまって検出された、西原大塚遺跡第137地点の弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡（532Y）と田子山遺跡第93地点の平安時代の住居跡（66～68H）についての所見をまとめることにする。

（1）西原大塚遺跡第137地点の532号住居跡について

西原大塚遺跡第137地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡（532Y）が検出された。

この532Yの住居構造は、南側が調査区域外あり、西側は攪乱により破壊されているため全容は不明であるが、規模は4m前後になると思われる、この時期のものでは平均的なサイズと言える。住居内には地床炉が設置され、床面は壁際を除き、ほぼ硬化していた。

出土遺物は土器と石器が僅かにある。土器は壺・甕形土器の小破片3点で、石器は砥石2点である。

特に土器の2・3であるが、2は口縁部が幅狭の複合口縁を呈し、複合部下端にハケ状工具による刻み目がまわる壺形土器、3は口唇部外面にハケ状工具による刻み目がまわり、輪積みによると思われる有段の甕形土器である。これらは東京湾沿岸部に特徴を有する土器と考えられる。

（2）田子山遺跡第93地点の平安時代の土器について

ここでは、田子山遺跡第93地点で検出された平安時代の3軒（66～68H）の住居跡から出土した遺物のうち、土器について簡単に触れることにしたい。

66H出土土器（第9図）

遺物としては、覆土全体から散在した状態で、比較的によく出土した。土器は須恵器坏（1～3）・須恵器甕（4・9～12）・土師器甕（5・6）で構成され、灰釉陶器（7・8）が共伴している。

須恵器坏はいずれも東金子製品と考えられる。時期は3の底部が欠損するが、1・2は底部に回転糸切り痕を残し、さらに口径～底径比は不明であるが、底径が1は推定底径6.0cm、2が5.0cmと縮小化の傾向があることから、おおよそ9世紀後葉に比定できようか。

土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」である。口縁部形態は6がやや「コ」の字口縁を呈するが、5はまだ「く」の字口縁を呈している。この特徴は根本編年（根本 1999）によるVI期（9世紀中葉）の「く」の字形の口縁を持つタイプと口縁部と体部の間がやや間延びするタイプ、さらに口縁部が「コ」の字形となるタイプの3種のタイプが共伴する段階に比定できる。また、5は口縁部内面及び外面に赤彩が施されると思われるため図示したが、6は不確定であるため図示はしなかった。いずれにせよ、これらの赤彩甕と思われる土器は赤色塗料の付着が不鮮明であるため、ここでは可能性があるに留め、今後新たに類例があれば改めて触れることにしたい。

以上、66Hの出土土器は、須恵器坏ではやや9世紀後葉に近い様相であるが、土師器甕から9世紀中葉に比定できる可能性もあり、時期は9世紀中葉～後葉に位置付けることにした。

67H出土土器（図版5-1）

本住居跡から出土した土器は、比較的少なく、床面に近い位置から出土したが、すべて小破片であった。そのため、実測は不可能であるため、写真図版のみの掲載にとどめた。

出土土器として掲載できたのは、1・2が須恵器環、3・4が土師器甕である。

須恵器環はいずれも小破片であるが、東金子製品と思われる。1・2は底部に回転糸切り痕が残り、底径に縮小化の傾向があるため、9世紀後葉～末葉に比定できようか。

土師器甕はいわゆる「武蔵型甕」で、3の口縁部はやや「コ」の字口縁の傾向にあることから、9世紀後葉に比定できるであろう。

以上、67Hの出土土器は、9世紀後葉～末葉に位置付けられる。

68H出土土器（第12図）

土器は覆土全体から散在した状態で、比較的によく出土した。出土土器は須恵器環（1～11）・須恵器甕（14）・土師器甕（12・13）で構成される。

須恵器環は大きく底部に回転糸切り痕を残すもの（1～5）と糸切り後周辺へ削り調整が施されるもの（6～10）、そして「ロクロ酸化焙焼成土師器」（書上 1996）と呼ばれる11の土器に分類される。製品としては、大部分が東金子製品と考えられるが、5・6・10の胎土中には白色針状物質が含まれることから、鳩山製品も含まれる。

前述した11の土器を除き、須恵器環は底部調整が「周辺へ削り調整」から「未調整」への過渡期と考えられることから、鳩山編年のHBV期（8世紀末葉～9世紀前葉）に比定できる（渡辺 1990）。

なお、11の土器は胎土に多量の白色針状物質が含まれるが、南比企窯群内ではこの製品の生産はないと考えられるため、他地域の製品との関連で考えるべきであろう。おそらく、この製品は書上元博氏が、大宮台地のさいたま市東北原・御蔵山中・和田北遺跡出土の資料について、「伝統的に「ロクロ土師器」を生産し続けてきた地域からの、より直接的な影響が感じられる。」（書上 1996）と説明するように、下総国の土器との関連が考えられる。同じ製品は市内でも過去に田子山遺跡第4地点4号住居跡から1例出土している（佐々木 1992）。

土師器甕は2点（12・13）出土している。いずれも、いわゆる「武蔵型甕」であるが、12は小型甕である。口縁部は顕著な「コ」の字口縁ではないことから、根本編年（根本 1999）によるIV～V期（8世紀後葉～9世紀前半？）に比定できるであろう。13の口縁部は僅かに受口状を呈していることから、「コ」の字口縁の兆しがかがえる。

以上、68Hの出土土器は、須恵器環と土師器甕の特徴から、およそ8世紀末葉～9世紀前葉に位置付けられるであろう。

（3）田子山遺跡の平安時代の住居跡について

最後に今まで田子山遺跡で検出された平安時代の住居跡を第10表にまとめてみたが、これによると35軒の住居跡及び小堅穴状遺構が検出されている。小堅穴状遺構は第21地点の21・22H・12D-A、第25地点の24・25・26H、第81地点の65Hの合計で7軒が確認されている。いずれも一辺3m未満の長方形を基本とする遺構で、床面は硬化しており、中には24Hのように出入口に使用されたと思われるスロープが設置されてものも存在する。

一般的な住居跡については、最も古いもので第4地点の7H、第7地点の16Hで8世紀後葉に比定さ

No	地点名	住居跡	平面形	規模 (m)	深さ	カマド				遺物	時期	備考	報告書
						数	位置	規模	壁への 張り込み				
1	第4地点	1H	長方形	3.50×2.50	35cm	1ヶ所	北壁中央	長さ95cm 幅110cm	50cm	須恵器環1点	9世紀末葉		
2		2H	長方形	5.00×4.05	25cm	1ヶ所	東壁中央	長さ130cm 幅120cm	40cm	須恵器環2点、須恵器 環1点、須恵器皿1点、 土師器甕4点、鉄製品 (鎌1点)	9世紀初 ～中葉		
3		3H	長方形	5.80×5.20	40cm	無	—	—	—	鉄製品(刀子1点)	平安時代	南西壁に一部 張り出し部あり	
4		4H	長方形	3.40×2.95	30cm	1ヶ所	東壁中央	長さ100cm 幅85cm	35cm	土師器甕1点、須恵器 環1点(いわゆる「ワコ ロ窯化徳成土器群」)	9世紀前葉		
5		5H	長方形	3.68×3.25	20cm	1ヶ所	東壁ほぼ 中央	長さ93cm 幅75cm	60cm	須恵器環17点、須恵器 環1点、灰釉皿1点、灰 釉壺1点、土師器甕3点	9世紀末葉		佐々木 1992a
6		6H	長方形	3.70×3.20	50cm	1ヶ所	北壁中央	長さ100cm 幅120cm	80cm	須恵器環1点、鉄製品 (火打金1点、不明品3 点)	9世紀後葉	カマド右横に 貯蔵穴あり	
7		7H	長方形	5.50×5.15	30cm	1ヶ所	東壁中央	不明	不明	須恵器環2点、須恵器 環1点	8世紀後葉		
8		8H	長方形	不明×3.65	35cm	—	—	—	—	須恵器環1点、鉄製品 (鉄あるいは鎌2点)	9世紀末葉		
9		9H	長方形	4.70×3.70	15cm	1ヶ所	北壁ほぼ 中央	不明	60cm	図示できるものなし	平安時代		
10	第5地点	10H	長方形	3.00×2.74	10cm	1ヶ所	南東隅	長さ85cm 幅100cm	45cm	灰釉皿1点、灰釉長頸 瓶1点、須恵器環1点	9世紀後葉 ～末葉		
11		12H	長方形	4.18×3.85	30cm	1ヶ所	東壁中央	長さ140cm 幅145cm	70cm	須恵器環11点、須恵器 皿1点、須恵器長頸瓶2 点、須恵器壺1点、土師 器3点、鉄製品3点(刀 子2点?、不明品1点)	9世紀末葉	墨書土器1点 あり/不明品 の鉄製品のうち 3は帯金具 か	佐々木 1992a
12		13H	方形	3.66×3.60	40cm	1ヶ所	南東隅	長さ135cm 幅120cm	70cm	須恵器環1点、須恵器 大甕1点、土師器甕1点、 鉄製品(刀子1点)、石 製品(磁石1点)	9世紀末葉		
13		14H	不明	不明	不明	無	—	—	—	無	平安時代	記載なし	
14	第6地点	15H	長方形 か	不明×4.80	65cm	2ヶ所	北壁 東壁中央	長さ155cm —	130cm 100cm	須恵器環14点、須恵器 皿1点、須恵器環形1点、 土製品(土師1点)、鉄 製品(刀子3点)	9世紀末葉	建替住居/北 壁のカマドが 新カマド/墨 書土器「手」1 点あり	佐々木 1992b
15	第7地点	16H	長方形	4.95×4.15	35cm	1ヶ所	東壁から 確認のみ	—	—	須恵器環2点、瓦(布目 2点、格子目1点)	8世紀後葉	カマドは東壁 の調査区外/2 本柱か	佐々木 1992b
16	第19地点	18H	長方形	4.56×3.90	40～ 48cm	1ヶ所	北壁	長さ165cm 幅114cm	94cm	須恵器環10点、須恵器 環2点、須恵器耳皿1点、 土師器甕3点、布目瓦1 点、鉄製品(刀子3点、 鎌?1点、不明品1点)、 土製品(不明品1点、土 師1点)	9世紀後葉 ～10世紀 前葉	住居跡A・B・ Cは建替ある いは建替住居 /住居跡Cは 焼失住居	尾形・ 深井2000
17	第21地点	19H	方形か	不明	5～ 11cm	2ヶ所	北壁 カマドA 北壁 カマドB	長さ94cm 幅95cm	34cm 50cm	須恵器環3点、土師器 甕2点、土製品(支脚1 点)、鉄製品(釘1点)	9世紀後葉	建替住居か/ 間仕切り溝?	尾形・ 深井2000
18		20H	長方形 か	不明×4.70	15～ 27cm	1ヶ所	北東壁	長さ93cm 幅90cm	65cm	須恵器環2点、須恵器 甕?1点、須恵器甕3点、 鉄製品(鎌1点)、石製 品(紡錘車1点)	9世紀前葉		

第10表 田子山遺跡における平安時代の住居跡一覧(1)

No	地点名	住居跡	平面形	規模 (m)	深さ	カマド				遺物	時期	備考	報告書	
						数	位置	規模	壁への 張り込み					
19	第21地点	21H	台形か	2.90×2.30	8～18cm	無	—	—	—	須恵器壺2点	平安時代	小壜穴状遺構 /床硬化面	尾形・ 深井2000	
20		22H	隅丸方形か	不明×2.25	7～27cm	無	—	—	—	鉄製品(釘1点)	平安時代	小壜穴状遺構 /床硬化面		
21		12D-A	隅丸方形か	不明×3.10	18～23cm	無	—	—	—	須恵器壺3点、鉄製品(不明品1点)	平安時代	小壜穴状遺構 /床硬化面 /12D-Bは近世以降の土坑		
—	第25地点	14H	方形か	不明	10～13cm	無	—	—	—	黒色磨研環1点(いわゆる「ロクロ酸化焙焼成土器群」)	平安時代	第5地点の14Hと同一住居	尾形・ 深井2000	
22		23H	方形	4.20×3.90	8～14cm	無	—	—	—	須恵器環1点、須恵器壺2点、石製品(砥石1点)	9世紀後葉	南東隅から凸堤を伴う貯蔵穴あり/南西隅も貯蔵穴か		
23		24H	長方形	3.60×2.20	34～43cm	無	—	—	—	黒色磨研環1点(いわゆる「ロクロ酸化焙焼成土器群」)、須恵器壺1点	9世紀後葉か	小壜穴状遺構/壁面にスロープあり/床硬化面		
24		25H	隅丸長方形	3.25×2.17	13～17cm	無	—	—	—	—	—	—		—
25		26H	隅丸長方形	不明×2.15	22～39cm	無	—	—	—	—	—	—		—
26	第29地点	43H	長方形か	不明×4.80	50cm	1ヶ所	西壁	—	—	須恵器環4点、須恵器壺2点、布目瓦1点	9世紀後葉	墨書土器1点あり/カマドは西壁の調査区外	尾形1995	
27	第41・42地点	50H	長方形	4.56×3.90	40～49cm	1ヶ所	東壁中央	長さ143cm 幅82cm	86cm	須恵器環4点、土師器壺2点、鉄製品(斧?1点、鉋1点、鏝2点)、銅製品(小型未開蝋燭?1点)	9世紀後葉	墨書土器「手」2点あり	尾形・ 深井1997	
28	第47地点	51H	隅丸長方形	不明×2.88	21～44cm	1ヶ所か	東壁か	—	—	須恵器環1点、須恵器壺1点、鉄製品(不明品1点)	9世紀後葉	カマドは東壁の調査区外か	尾形・ 深井1999	
29		52H	不明	不明	43～51cm	—	—	—	—	須恵器環1点、須恵器壺1点、須恵器蓋1点、土師器壺1点、鉄製品(刀子1点、鏝1点)、石製品(砥石1点)	9世紀後葉か	住居の大部分が調査区外		
30	第49地点	54H	隅丸方形	3.34×2.78	4～11cm	1ヶ所	北壁	—	—	—	—	—	—	尾形・ 深井1999
31		55H	隅丸長方形	5.40×4.10	8～11cm	不明	—	—	—	須恵器環2点、土師器壺2点	10世紀前葉か	焼失住居		
32	第69地点	62H	長方形	3.77×3.36	45～56cm	1ヶ所	北壁	長さ160cm 幅106cm	85cm	須恵器蓋1点、須恵器壺6点、須恵器皿1点、須恵器壺1点、須恵器蓋1点、土師器壺6点	9世紀中葉	—	尾形・ 深井2002	
33	第78地点	63H	長方形	不明×3.66	31～43cm	1ヶ所	東壁	長さ約150cm 幅87cm	約90cm	須恵器環4点、須恵器壺1点、土師器壺2点、石製品(砥石1点)、鉄製品(鏝1点、不明品2点)	9世紀後葉	—	尾形・ 深井2003	
34		64A・B	長方形	5.90×3.95	29～45cm	2ヶ所	東壁カマドA	長さ不明 幅70cm	不明	須恵器環3点、須恵器壺2点、土師器壺7点、ミニチュア1点、石製品(砥石1点、石皿1点)、鉄製品(刀子1点、鏝1点、不明品1点)	9世紀前葉～中葉	拡張後に建替えが行われた住居跡と考えられる。墨書土器1点あり		
		64C	長方形	3.67×2.86	—	1ヶ所	北壁中央	長さ64cm 幅56cm	46cm	—	—	—		—
35	第81地点	65H	長方形	2.70×2.10	24～29cm	無	—	—	—	須恵器環1点、須恵器長頸瓶1点	9世紀後葉	小壜穴状遺構と思われる	尾形・ 深井・ 青木2004	

第10表 田子山遺跡における平安時代の住居跡一覧(2)

れる。出土土器の特徴は、須恵器環では口径13cm前後の底部には全面回転ヘラ削り調整が認められる。製品としては、胎土に白色針状物質を含むものもあることから、8世紀後葉には東金子製品と鳩山製品がほぼ同じ割合で共存するものと思われる。土師器甕はすべていわゆる「武蔵型甕」と呼ばれる製品であり、在地系土師器はすでに存在していない状況である。

また最も新しいものでは、第19地点の18H、第49地点の55Hがある。基本的に田子山遺跡では、住居跡35軒中、9世紀後葉～末葉の住居跡は19軒と最も多い傾向にあるが、18Hは9世紀後葉～10世紀前葉、55Hは10世紀中葉～後葉とそれ以降に位置付けらる。土器の特徴では、9世紀までの須恵器環では、東金子製品あるいは鳩山製品というように製品の帰属がある程度可能であるが、10世紀に入ると、酸化炎焼成の製品でも作りの悪い、帰属が困難な製品が共存するようになる。土師器甕でもいわゆる「武蔵型甕」ではなく、口縁部が短く「く」字状を呈する器厚の分厚い土器に大きく変化するものと考えられる。

以上、田子山遺跡における平安時代の住居跡を第10表にまとめたが、調査終了地点の報告書がすべて刊行しているわけではない。今後はこれらの地点についても早急に報告書として刊行し、志木市の歴史を解明する上での基礎的な分析を行うことが急務である。そして、各時代で体系的な解明を行うことで、発掘調査が初めて記録保存としての役割を果たせたと言えるであろう。

[引用・参考文献]

- 尾形則敏 1995『志木市遺跡群VI』志木市の文化財第21集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 1997「第5章 田子山遺跡第41・42地点の調査」『志木市遺跡群VII』志木市の文化財第25集 埼玉県志木市教育委員会
- 1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
- 2000『埋蔵文化財調査報告書1』志木市の文化財第29集 埼玉県志木市教育委員会
- 2002「第2章 田子山遺跡第69地点の調査」『志木市遺跡群12』志木市の文化財第32集 埼玉県志木市教育委員会
- 2003「第2章 田子山遺跡第78地点の調査」『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2004『志木市遺跡群14』志木市の文化財第36集 埼玉県志木市教育委員会
- 2008『西原大塚遺跡138地点 西原大塚遺跡154地点 発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告 第14集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 書上元博 1996『八木上／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第165集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 佐々木保俊 1992a「第4・5章 田子山遺跡第4・5地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 埼玉県志木市教育委員会
- 1992b「第4・5章 田子山遺跡第6・7地点の調査」『志木市遺跡群IV』志木市の文化財第17集 埼玉県志木市教育委員会
- 根本 靖 1999「所沢市東の上遺跡の基礎研究Ⅱ—土師器煮沸員の変遷について—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

版 图



1. 調査区近景



2. 調査区整備風景



3. 213号土坑



4. 調査風景



5. 66号住居跡



6. 66号住居跡



7. 66号住居跡カマド遺物出土状態



8. 66号住居跡カマド



1. 67号住居跡



2. 67号住居跡硬化面



3. 68号住居跡測量風景



4. 68号住居跡遺物出土状態



5. 68号住居跡遺物出土状態



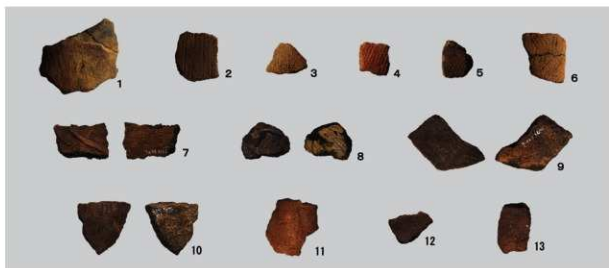
6. 68号住居跡粘土檢出状態



7. 68号住居跡



8. 68号住居跡入口梯子穴付近



1. 213号土坑出土遗物



2. 66号住居跡出土遺物



68号住居跡出土遺物



1. 67号住居跡出土遺物



2. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘風景



3. 11号溝跡



4. 11号溝跡



5. 214号土坑



6. 215号土坑



7. 出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘風景



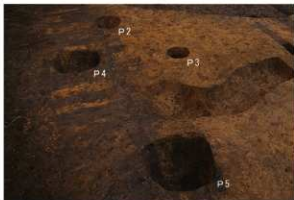
3. 532号住居跡



4. 532号住居跡



5. 532号住居跡炉跡



6. 2～5号ピット



7. 532号住居跡出土遺物



8. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 537号住居跡



3. 537号住居跡東コーナー



4. 537号住居跡赤色砂利層検出範囲



5. 537号住居跡炉跡



6. 537号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状態



7. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しきいせきぐん 18							
書名	志木市遺跡群 18							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第41集					
編著者	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗園1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成21 (2009) 年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田子山遺跡 (第93地点)	志木市本町2丁目 1748-11	11228	010	35° 49' 50"	139° 35' 2"	20060424 ～ 20060512	175.46	個人住宅建設
田子山遺跡 (第96地点)	志木市本町2丁目 1698-29	11228	010	35° 49' 56"	139° 34' 57"	20070820	55.75	個人住宅建設
西原大塚遺跡 (第137地点)	志木市幸町3丁目 3137-4	11228	007	35° 49' 24"	139° 33' 50"	20061109	100.00	個人住宅建設
西原大塚遺跡 (第155地点)	志木市幸町3丁目 54街区9-3画地	11228	007	35° 49' 27"	139° 33' 47"	20080318	120.00	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
田子山遺跡 (第93地点)	集落	縄文時代早期 平安時代		土坑 住居跡	1基 3軒	土器破片 土師器・須恵器・ 灰釉陶器・土製支 脚・鉄製品		墨書土器2点、そ のうち1点は「ロ クロ酸化焙焼成土 師器」
田子山遺跡 (第96地点)	集落	縄文時代 古墳時代後期～平安時代 平安時代		土坑 溝跡	1基 1本	なし 須恵器小破片		
西原大塚遺跡 (第137地点)	集落	弥生時代後期末葉 ～古墳時代前期 縄文～弥生時代以降		住居跡 ピット	1軒 5本	土器小破片・石器 なし		
西原大塚遺跡 (第155地点)	集落	弥生時代後期末葉 ～古墳時代前期		住居跡	1軒	土器		

志木市の文化財 第41集

志木市遺跡群 18

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発 行 日 平成21(2009)年11月30日
印 刷 株式会社 白 峰 社